

# タイ国における第2次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史： 未利用資料を中心に

村嶋英治<sup>†</sup>

## Japanese Language Education in Thailand before the End of World War II: Introduction of New Documents

Eiji Murashima

This paper is an attempt to expand the knowledge of Japanese language education in Thailand before the end of World War II. Up to the present, there are few works on this topic, and existing ones mainly focused on the Japanese language education in Bangkok Japanese Language School, which was opened on the 21st December 1938 by the subsidies of Japanese Ministry of Foreign Affairs. There are still many documents related to Japanese language education in Thailand, however, most of them are not investigated yet.

Relying on such new documents, the following subjects are treated in this paper, (1) the establishment of Japanese Language course in Bophitphimuk Middle School in B.E. 2477 (1934/5) and its first Japanese teacher (Uematsu Hideo), (2) Japanese language textbooks and dictionaries written and published by Thai authors and Miki Sakae (Wathana Triphrukphan) from 1937 to 1943 in Bangkok, (3) Japanese language teaching project (1934–1938) conducted by Japanese teachers (Goto Zengo and others) of Japanese Primary School managed by the Association for Japanese Community in Siam.

### はじめに

タイにおける第2次世界大戦終結までの日本語教育史についての既存研究は、日本の文化事業として1938年12月21日に開所した日泰文化研究所（Thai-Japanese Cultural Research Institute）付属の盤谷（バンコク）日本語学校の研究に限られており、この時期におけるタイ側教育機関における日本語教育及びタイ人による日本語学習図書の出版については殆ど知られていない。また、盤谷日本語学校開設に至る前史についても、一部の外務省記録が利用されているとは言え、不明部分が多く残されている。

例えば、松井嘉和、北村武士、ウォーラウト・チラソンバット『タイにおける日本語教育：その基盤と生成と発展』（錦正社、1999年2月）の44頁は、「(2) タイにおける日本語教育略史」と題し、次のように書き始めている。

#### ①第二次世界大戦前

日本とタイとの交流が盛んになる昭和初期の時期のタイにおける日本語教育については現在の

---

<sup>†</sup> 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

ところまだ詳しく分かっていないが、昭和十年代に入り日本がアジア地域への侵出を始め、タイとの関係が深くなっていくにつれて、言語と文化の普及が企図された。

昭和12年(1937)日本の外務省情報部「外国ニ於テ外国人ニ日本文化並ニ日本語ヲ教授スル学校、団体等一覧表」の暹羅(シヤム)の項に、

盤谷/マタヨム・ワットポピット・ピチック(筆者注:ピムクの誤り)学校/日本語

との記述があり、当時すでにポピットピムク学校で日本語教育が行われていたことが分かる。

昭和13年(1938)には日本政府は、タイ国における日本語普及機関として日泰文化研究所および付属日本語学校を開設した。

更に、同書50頁の「(3)昭和十年代タイ国日本語教育関連年表」では、1934年、35年、36年の3年間について、タイ国における日本語教育についての記述はなく、37年になってポピットピムク校で日本語の授業があること、及び星田晋五の論述を引用して「日本人会の事業として日本語講習会が行われる」と記すに止まっている。

中山光男「タイ国における日本語教育」(『日本語教育』60号、1986年11月、161頁)は、「3.1 日本語教育略史 タイ国における日本語教育は、1947年ポピットピムク高校(国立)において開始された」と述べ、同校の戦前における日本語教育には言及していない。

嶋津拓『海外の「日本語学習熱」と日本』(三元社、2008年)の第3章、「シヤム(タイ)における「日本語学習熱」について」は、前掲松井嘉和他著書が詳細不明とした、暹羅国日本人会のタイ人向け日本語教授事業について、アジア歴史資料センターサイトの開設によりネットで容易にアクセスできるようになった、バンコクの日本人学校ファイル(外務省記録I.1.5.0/2-7-10「盤谷日本国民学校」)を利用したことは評価できる。また、ポピットピムク校の日本語教育に言及している日本語図書も多数紹介している。

しかし、嶋津氏の本著作においても、利用した日本人学校ファイル内にある資料の内容的制約のために、暹羅国日本人会のタイ人向け日本語教授の記述は、外務省が初年度に限り外郭団体の国際文化振興会に補助金を迂回支出させた端緒部分と翌1935年、即ち1934-35年部分のみに限られており、1936-38年部分を欠いている。また、1934年から38年に亘る日本人会の日本語教授補助金は、初年度を除けば、外務省の文化事業部が直接補助金として予算化したのが、その資料にも言及がない。ポピットピムク校での日本語教育についても、担当教師名、開始後の消長などの具体的情報を欠き、恰も同校の日本語教育が戦争後期まで一貫して存続したかのような記述となっている<sup>1</sup>。

本稿は、第2次世界大戦終結期までのタイ国の日本語教育に関し、既存研究の乏しい4つの事項、即ち①タイ国立中等学校ポピットピムク校の日本語教育と日本人教師植松秀雄、②タイ人著者が刊行した10種類の日本語学習書、③1911年から在タイし1939年にタイに帰化した三木栄(タイ名ワタナー・トゥリーブルックパン)が日本・タイ両国人向けに刊行した5種類のタイ語・日本語学習書、④盤谷日本語学校成立以前の前史、即ち暹羅国日本人会経営の日本人小学校訓導によるタイ人向

<sup>1</sup> 最近の成果、例えば、田中寛『戦争・言語文化・記憶：植民地教育史研究の視点から』大東文化大学田中寛研究室、2019年3月、或は山口雅代『戦前戦中のタイにおける日本語普及と諜報工作：チェンマイ日本語学校とインパール作戦』大空社、2016年7月、などを見ても盤谷日本語学校以前の日本語教育についての研究は深まっていないことがわかる。

け日本語教授事業をできるだけ明らかにしたい。そのための資料としては、従来の研究では利用・紹介されたことのない、タイで刊行された15種の日本語学習書（タイの大学図書館の所蔵は皆無）や暹羅国（泰国）日本人会会報などの資料を用いる。なお、上記②、③の日本語学習書に関しては、書名・著者・刊行年・形態及びはしがき等の紹介に止まり、内容の日本語教育学的分析は行っていない。

## 1 ボピットピムック学校の日本語教育開始（仏暦2477年）と植松秀雄

筆者はボピットピムック校の最初の日本語教師植松秀雄と、同校の日本語教育の開始について、村嶋英治編集・解説『天田六郎氏遺稿、「シャムの三十年」など』（早稲田大学アジア太平洋研究センター研究資料シリーズNo.8, 2019年3月, 早稲田大学リポジトリで自由にダウンロードできる）の281-282頁で解説したことがある。この解説に幾らか新資料を加えると、次のようになる。

日本の外務省記録K.4.2.0.3「各国に於ける外国人雇傭関係雑件」中の、在暹羅国日本公使館調査『暹羅国傭聘外国人人名録』（昭和10年5月末現在）の中に、「[シャムの] 文部省教務局教科書課勤務支那語教科書検閲事務、官立ボピットピムックスクールに於いて日本語教授」を職務とする植松秀雄という日本人が存在する。植松は東京府出身の法学士で、暹羅文部省嘱託として100パーツの月給を得ているという。

ボピットピムック校で日本語教師であった植松秀雄（1883-1946?）は、本籍和歌山県、1903年に第一高等学校を卒業（『一高同窓会会員名簿』1937年, 83頁）し、1907年7月には東京帝大法学部政治学科を卒業して法学士となった（『東京帝国大学一覽 従大正四年至大正五年』, 1916年, 掲載の「学士及卒業生姓名」113頁）。鳩山一郎（1883-1959）、村上恭一（1883-1953）などは、一高・東大の同期生である。

植松秀雄は1945年の日本の敗戦後タイ残留を希望し、タイ政府の調査に対し自分は1927年1月23日に来タイし、日本人妻のキミエ（当時54歳）は1940年8月8日に来タイした、と答えている（タイ外務省文書課WW.2/3:15/1）。一方、日本の外務省外交史料館所蔵の旅券下付表によれば、1940年6月14日に植松幸雄（秀雄長男、東京市牛込区南榎町、1920年11月26日生）が、父秀雄の呼寄で泰国に渡航するために東京府で旅券の下付を受けている。続いて、1940年12月13日に植松キミエ（秀雄妻、東京市牛込区南榎町、1891年7月20日生）が、夫の呼寄で泰国に渡航するために東京府で旅券の下付を受けている。

植松が、1907年に東京帝大法学部を卒業した後、タイに渡る1927年までの20年間に何をしていたのかは不詳である。

タイの著名作家、セーニー・サワポン（1918-2014）は、2004年3月24日にバンコクの私邸で、村嶋のインタビューに応じ、植松秀雄との関係を次のように語った。

セーニーはバンコクのボピットピムック中等学校を卒業し、1936年にタマサート大学に学生登録をした。ボピットピムック学校在学時に丁度、外国語教育課程（7-8年生）が創設された。この課程では英語は全学生必修であり、第2外国語として仏、独、日、中の4ヶ国語の中から、1ヶ国語を選択することを要した。セーニーはドイツ語を選択した。第2外国語の日本語の教師は、文部省雇いの植松秀雄であった。セーニーは植松に誘われて、週刊カーウパー誌創刊から1年間くらいの間に

は、同誌に記事や短文を書いたことがある。当時植松は40歳過ぎで、タイ語が上手く、タイ人の妻がいた。その後、植松がどうなったかは知らない<sup>2</sup>、と。

ポピットピムック学校外国語教育課程は、仏暦2477(1934/5)年に創設されており、植松はタイの公教育機関で、日本語を教えた最初の教師であろう。

カーウパープは1938年9月に毎土曜日発行の週刊誌(写真①は1939年2月11日の第23号)として発足し1年間続いた。

植松は1939年に『カーウパープ』(画報の意)社を登録し、社長に就任した。

カーウパープ株式会社設立登録(登録日1939年7月8日)の発起人は7名で、日本人は植松秀雄、大谷長三(1901-1997、大谷洋行主)の2人のみで、残り5名はタイ人でブラユーン・ダーラーコーン(นาย ประยูร ดารากร ณ อยุธยา)が筆頭であった(『タイ官報』56巻、1201-1202頁、1939年7月24日号)。

澤田謙は、1939年8月17日に、駐タイ日本公使館嘱託という肩書の植松秀雄に面会したが、植松は、自分を社長としてタイ字の日刊紙『カーウパープ』が39年9月1日より発刊予定であると語った(澤田謙「新嘉坡から泰国へ」、『太平洋』2巻11号、1939年11月、104頁)。

中村孝志「台湾と南支・南洋」(中村孝志編『日本の南方関与と台湾』天理教道友会、1988年、21、29頁)によると、バンコクで発刊されたカーウパープ<sup>3</sup>(1939年創刊、タイ文、発行部数4万)

<sup>2</sup> セーニー・サワポンは村嶋の質問に次のように答えた。

自分の祖父は、タイ生まれの潮州人である。1936年にタマサート大学に学生登録した後、新聞社シークルンやサヤームラートで英語ニュースの翻訳の仕事をした。スペイン内戦の記事を多数翻訳するうちに、政治イデオロギーに関心を持ち、Graham Stephen 著 *Stalin* (スターリン) をタイ語訳し、実名ブンソン・パムルンポン(บุญส่ง ปำรุงพงษ์) で1938年9月に出版した。読むと判るがこの本の内容は、スターリンに賛同したものではなく、批判的な内容である。植松の週刊カーウパープに寄稿した時も、この実名で書いた。タマサート大学に在学しながら1939年から1940年後半まで1年余経済省の雇員(サミアン)として働き、ドイツ留学の奨学金を得たので退職した。留学のため、上海、天津を経てハルビンに3ヶ月間留まり、シベリア鉄道でソ連を通過するためのビザを待った。ハルビンでは白系ロシア人やドイツ人と交流した。1940年末のタイ仏印紛争の時、自分はハルビンに滞在中であった。結局ソ連のビザを得ることができず、タイに戻るために1941年2月(丁度東京で日本の調停によるタイ仏交渉中)に大連から船で日本に渡った。日本では、日本政府の宣伝である“No More War”とか“Japan Fight for Peace”のスローガンを目にした。日本には10日程滞在して神戸から西貢丸に搭乗してバンコクに41年3月に帰着した。1942年頃、ウィットワータカーンが外務副大臣の時に、外務省に雇員として入省し、タマサート大学卒業と同時に3等官に昇進した。外務省ではタウィー・タウェーティクンの自由タイグループに属し、国外に出ることなくバンコクのOSSとの連絡を担当した。

作家ナーイ・シンラピー(パコン・プラナパコン, ปกรณ์ บุรณปกรณ์, 1904-1952, 父はサヤームオブザーバー編集長)は日泰文化研究所の平等通照から資金提供を受けて『黄色の皮膚』(ผิวเหลือง)という新聞の編集長になったことは、当時の記者仲間にはよく知られたことである。この新聞は長続きしなかった。

なお、セーニーは、満州国ハルビン滞在中の経験を日本軍支配下の戦中のタイの経験と重ね合わせて、権力者日本の支配下で苦しむ白系ロシア人女性を描いた『満洲の空』(ポケットブックサイズ、139頁)を1946年に発表しているが、セーニーの言では同書は翻案であるという。

<sup>3</sup> タイの国立図書館が1972年に刊行した *Periodicals and newspapers printed in Thailand between 1935-1971: A Bibliography* に週刊カーウパープも日刊カーウパープも記載されておらず、タイ国立図書館は1972年時点で両者を所蔵していないことが判る。2020年1月8日に筆者は、タイ国立図書館を訪問し4階の雑誌新聞部門で確認したが、従来通り両紙誌の所蔵はなかった。1938-45年の日タイ関係研究の重要な資料である両紙誌を所蔵するタイの公共図書館は皆無のようである。しかし、タイ現代史作家ナーイ・ホンファイ(นายพนทพวย 実名シンラバチャイ・チャーンチャローム)の著作には、日刊カーウパープからの引用がある。1998年1月7日に筆者のインタビューに、同氏はタイ国立図書館所蔵のカーウパープを利用したと答えた。少なくとも同氏が利用する迄は所蔵があったものと考えられる。

ところで、最近のタイ国立図書館には、利用者は戸惑うことが多い。タイで古い雑誌新聞を所蔵する図書館は、国立図書



写真①

の資金を提供したのは台湾の善隣協会（1917年に台湾総督府と台湾銀行が半金ずつ出資して作った財団法人）であるという。善隣協会は、この他にも盤谷日報（1942年創刊，和文，発行部数1300）、中原報（1942年創刊，漢文，発行部数2万5千）にも資金を出した。

国際文化振興会常務理事伯爵黒田清（1893-1951）は、1941年3月に日本を發ち、タイで1ヶ月余、仏印で20日ほどの視察を行い、6月6日に帰国した。黒田が海外にあった時期に南方文化事業委員会泰国部会が設立された。泰国部会は、国際文化振興会理事長永井松三（1877-1957，元外務次官，元駐独大使）を委員長とし、委員は外務省関係者を中心に、木村日紀（1882-1965，国際仏教協会常任理事）、林久治郎（1882-1964，南洋協会理事長，元シャム公使）、矢田部保吉（1882-1958，国際学友会常務理事・日本タイ協会理事長代理，元シャム公使）、新田義實（1894-1992，三菱商事会社機械部長代理，前三菱商事バンコク支店長）、宮原武雄（1901-1966，タイ室東京事務局長）、佐藤致孝（1891-1945，東京外国語学校タイ語科講師）など13名であった。泰国部会の委員に任じられた黒田清は、1941年6月13日の泰国部会の第一回会合で「泰国視察報告」を行った。

---

館に限られているのに、国立図書館は新聞雑誌の所蔵リストを非公開にしてしまった。2020年1月8日に国立図書館4階新聞雑誌書庫の係員は、筆者の質問に対して「新聞雑誌リストは公開しないことになった。リストを公開すれば、それを見てもこれも見たいと請求する人が出てくるから。読みたいタイトルと出版時期を書いてくれれば、係員が書庫で探して持ってくる。しかし、所蔵していても状態の悪いものは、係員の判断で閲覧させない。予算もないからマイクロフィルムを作製することもない」という主旨の回答をした。近現代に公刊された自国の新聞雑誌の所蔵リストを、その国の国立図書館が非公開にするなどは、あり得ない話のように思われるかもしれないが、事実である。タイの近現代史研究にとって大きな痛手となるであろう。

その報告の中で、ポピットピムック校の日本語授業は、担当者の植松が辞任した後、代わりの教師がおらず、消滅に近いと次のように述べた。

表面に現れて最も文化工作の盛んなのはドイツであります、ドイツの文化工作といふのは映画工作とドイツ語普及であります、泰の外国語学校〔ポピットピムック校のこど〕に以前は日本語、支那語、フランス語、ドイツ語とあつたのでありますが、日本の植松氏が彼処の教授を辞されて以後といふものは日本語の教授は人を得ることが出来ずしてそのまま日本語は消えるやうになつてしまつた<sup>4</sup>、近頃では支那語も排斥され、仏印との争の後フランス語も減び、殆んどドイツ語の独壇場であるといふやうな有様であります（『南方文化事業委員会第三回会合経過要録』（南方文化事業委員会記録、第三輯<sup>5</sup>）、国際文化振興会、1941年、6頁）。

また、黒田清は植松のカーウパープについて「カオパープ〔カーウパープに同じ〕といふ非常に安い雑誌が出来てこれは非常に泰人の趣味に合つて売れたのでありますが、その後それが新聞になりまして今植松氏が之を経営して居られますが、現在一万八千位の部数を発行して居る、一万八千といふと大したことではないのでありますけれども、泰では相当大きなものださうです」（同上書、8頁）。

植松は日本敗戦後タイ残留を希望した日本人756人の一人だが、認められなかった（タイ外務省文書課 WW.2/3:15/1）。1946年に帰国し間もなく大阪で病死した（前掲村嶋英治編集・解説『天田六郎氏遺稿、シャムの三十年など』194頁）。

## II タイ人による10種類の日本語学習書の著作出版（1937-1942）

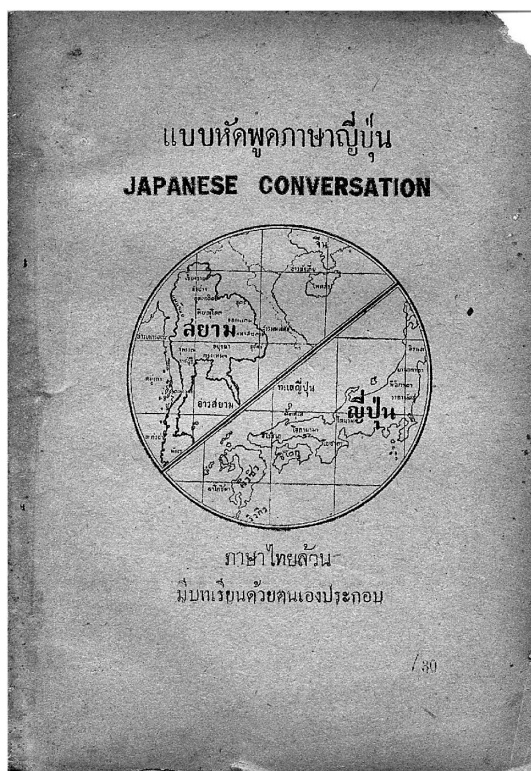
既存研究には、タイにおける日本語教育の始まりの時代（第2次世界大戦期まで）に、タイ人が著した日本語学習書について言及したものは存在しないようである。ここでは筆者の手許にある10種

---

<sup>4</sup> 松宮一也『日本語の世界的進出』婦女界社、1942年、189-190頁は、亜細亜及び南洋における日本語の教育状態に関し、泰国については盤谷日本語学校の他に「盤谷には外国語学校がある。マタヨム・ワット・ポピットピムック学校 Matayom wat Borpitpimuk に日本語科があつて、日本に留学した Naksat Ladawan 氏が約十名の学生に日本語を教授して居り」と述べている。これは植松が退職した後も、同校で細々と日本語教育が続いたことを示すものであろうか。しかし、それも短期間に過ぎなかったようである。1938年8月から1941年3月まで在タイし、日泰文化研究所及び盤谷日本語学校の初代責任者として、タイにおける日本語教育に精通していた筈の星田晋五は次のように書いている。

タイ国にはバンコック市に官立の外国語学校〔ポピットピムック校のこど〕が一つある。外国語学校といつても、元は中学程度であり、中学六学年の最終二学年に外国語科目を加味したものであつたが、昭和十五年度から専門程度に改められた。この中には日独仏支語科があり、日本語科は、かつて十指にあまる生徒があつたが、漸減して昭和十四年度限りをもつて日本語科生皆無となり、昭和十五年度よりは自然消滅の状態である。そしてこの外国語学校では公立学校卒業の資格を得るのであつて、文部省認可とはいへ私立夜学の〔盤谷〕日本語学校卒業の資格は、実際の学歴としては、さほど価値あるものでないが、機微な事情から、バンコック日本語学校の校門には数百の生徒が門前市をなしながら、官立外国語学校日本語科には生徒が遂に消滅した。しかし、これは外国語学校日本語科志願者がバンコック日本語学校の方へ吸収移動したためのものでない。かへつて、日本タイ文化研究所は、日本語科存続盛返へしに骨折つたのである。仏支語科もまた他の意味で漸減していたが、独語科のみ盛況を呈した。しかし、日泰友好和親条約締結、国境紛争調停東京会談後の将来、いつまでもかかる状態ではないであろう（星田晋五「タイ国に於ける日本語」『新亜細亜』3巻7号、1941年7月号、43頁）。

<sup>5</sup> 筆者は、この第三輯を古本市場で入手したが、サイニー及び国会図書館サーチでの検索では、第三輯を所蔵する図書館はない。



写真②

類（本稿に総ての表紙写真を掲載）に限り紹介したい。

この10冊は、筆者が1980年から2005年までの間にバンコクの古本市場で収集したものであるが、Union Catalog Thai Academic Libraries（タイ全国の大学図書館所蔵書を横断検索できる）やWorld-Catで検索する限り、タイの大学図書館及び世界の主要図書館で、この10冊中の1冊でも所蔵している図書館は存在しない。

10種類中の最初の2種類は、仏暦2480年（1937/38年）に刊行されている。このうち、発行年月日まで明記されているのは、1937年8月12日発行、ポー・ウィセートシリ（ป. วิเศษศิริ）著『日本語会話（แบบหัดพูดภาษาญี่ปุ่น）』（48頁，30サタン）（写真②）である。表紙にはJapanese Conversationという英語タイトルも印刷されているが、「総てタイ語，独習用レッスン付」とタイ語で印刷されている。前半は，数，お金，買物，ホテル，食事，日にちと時間，季節と天気，社交，娘との会話，鉄道，鉛筆の数え方，女中に関するもの，日用品，食べ物，人称代名詞，常用会話，訪問時の挨拶，肉を買う時，野菜を買う時の項目毎に，関連する多数の単語・例文をタイ語で記し，続いてその日本語訳をタイ文字で書いている。本書の後半は，8課（動詞「ある」の用法，数量詞「枚」，人称代名詞，時制，格助詞「の」の用法，丁寧語と普通語，日月時間，簡単な話し言葉）に分けて，タイ語日本語訳又は日本語タイ語訳の練習例文を列挙している。

著者の前書きは纏まりを欠くが，全文は次の通りである。

日本語を話したい人が多いと考えたので、本書を編集した。編集においては、使用頻度の高い単語を探すことに努め、かつ易しい言葉を探すことに努めた。これは学習中の人や学習書を使ってこれから会話の練習を始めたいと思っている人の便宜を考えてのことである。

本会話集の日本語の発音は少しずれている場合もあるだろう。例えば Go を โงะ とするか โก とするか。โงะยัง 御飯（食事をする）を โกยัง 又は โกะยัง と読む人もいる、などが一例である。何事も常に話すようにして馴れ、日本語既修者に質問するように努めることである。この外にも U (อี+อุ) の発音も分かりにくい。

ポー・ウィセートシリ

1937年8月12日

著者の前書きに続き、次の出版者の言が付けられている。その全文は

私が出版したこの日本語会話練習書が、現在印刷中の中国語練習書と共に、もう一つのアジアの言葉に関心を持つ読者の利益となるように希望する。もし本書が学習者の満足を得られるならば、今後続編を刊行するつもりである。ここに、編集者ポー・ウィセートシリ氏に感謝を表する。

仏暦 2480 年に刊行されたもう一冊は、タルク・ブンナーク (ตฤกษ์ บุนนาค) 『タイ日辞書 (อภิธานไทยญี่ปุ่น)』 (132 頁, 1 パーツ) (写真③) である。タイ単語に続いて、その日本語訳語をタイ文字で記している。発行者は、日暹協会 (ญี่ปุ่น-สยามสมาคม, 1935 年 11 月 4 日設立) である。日暹協会会長 プラヤー・サリットディカーンバンチョン<sup>6</sup> (พระยาสิทธิการบรรจง, Phya Srishtikar Bangchong, 1889-1967) は本書の序文を次のように書いている。

日本とシャムの国及び国民の間の友誼を深めるため、日暹協会は両国民が交際の機会を得られるような事業に取り組んでいる。

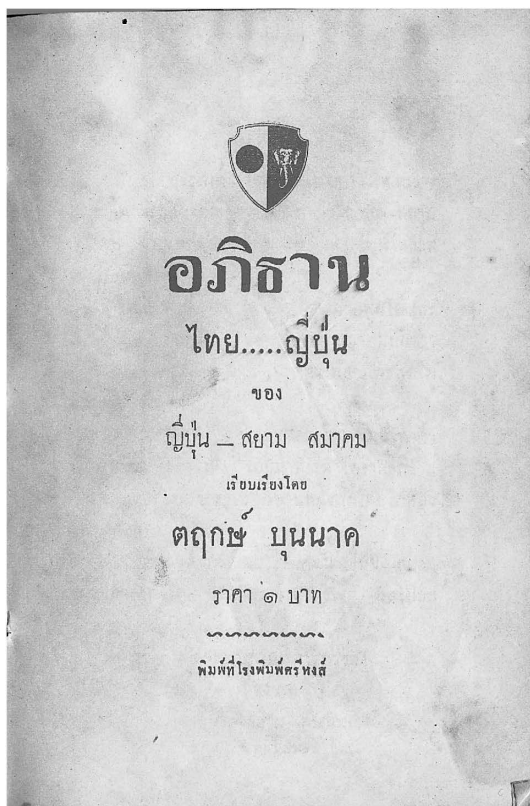
会話には双方が話すことができかつ理解できる言語を使うことになるので、日本人と交際するシャム人は日本語を学ばなければならない。少なくとも、どうにかしゃべれ、かつ聞き取れる程度には。

タイ人は話す前にタイ語で考え、タイ語と一致する日本語を探すことになるが、そのようなタイ単語の多くは、このタイ日辞書に採用されている。本辞書はタイ語を読むことができる者が日本語を練習するのに適している。

なお、単語を並べて、文章を作る方法については、日暹協会は今後文法教科書、日本語練習帳を刊行する予定である。

<sup>6</sup> 彼のローマ字名 Phya Srishtikar Bangchong を、タイ語の読めない日本人はローマ字表記に近い「スリシチカン」などと発音した。彼の経歴は、1906 年に国王の奨学金でイギリスに留学し 1913 年まで鉄道技術を学んで帰国、1914 年にシャム鉄道院に就職、1931 年 6 月 10 日-12 月 15 日シャム鉄道院総裁代行、1932 年 8 月 1 日-33 年 4 月 3 日同総裁、33 年 4 月 3 日-35 年 7 月末国営電力会社社長、35 年 8 月 1 日-38 年 7 月 1 日シャム鉄道院技監である (『プラヤー・サリットディカーンバンチョン葬礼記念本』タイ語、1967 年)





写真③

本書の著者タルク・ブンナークは、有力貴族ブンナーク一族の中でも名門の生まれで、少年時代の1921年10月に日本人医師の磯部美知に伴われて台湾に留学し、歯科医となった人物である<sup>7</sup>。

タイ人による日本語学習書の刊行は、仏暦2480年（1937/38年）ののちは、1941年12月の日タイ同盟成立以後に集中している。この時期は、タイに進駐した日本軍人や急増した在タイ日本民間人との間に、日本語会話の必要が増大した。それ故、次のような日本語会話の指南書が刊行された。

ウット・ウィクロサップ (วิทย์ วิเคราะห์ศัพท์) 『独習日タイ会話のあらまし (แนวสนทนาภาษาญี่ปุ่น-ไทยโดยตนเอง)』 (カセムバナキット, 44頁) (写真④)。

ウットは筆名と思われる。本書初版は1941年12月27日に発行された。その前書きでウットは「私が本書を編集した理由は、日タイ両国が団結して攻守同盟を締結したからである。本書はタイ人公衆が日本語を練習したり、日本軍民との会話に用いるためである。これによって、我々が彼等と会った時、彼等が尋ねたことに即答できるようになる。更に我々が我々の友邦人と応酬できるようになれば、我が国の名誉を高めることにもなるだろう」と書いている。

本書は数え方、年月日、食事、コーヒーショップ、ホテル、乗車、レンタカー、汽船、買物など12章に分けて、日本の単語或は例文の発音をタイ文字で書き、続いてタイ語の訳を付している。本

<sup>7</sup> タルク・ブンナークについて詳しくは、前掲村嶋英治編集・解説『天田六郎氏遺稿、「シャムの三十年」など』292-295頁を参照。



写真④

書は発売後1週間で売り切れ、1942年1月3日に増刷した。

プラユーン・ピッサナーカ (ประยูร พิศนาคะ) 『タイ日会話の手引き (คู่มือสนทนาไทย-ญี่ปุ่น)』 (アクソンチャローンタット, 1942年2月5日発行, 47頁) (写真⑤) は、前者とは逆でタイ語を前に置き続いて、その日本語訳音声をタイ文字で書いている。本書の「はしがき」で、プラユーンは、「本書では総てタイ文字を用いている。私は前もって白状しておくが、本書は松宮先生〔松宮彌平?〕やその他の英語本を種本として訳したものである。また、編集の時間が限られ、かつ私の知識も少ないので、日本語の発音表記は正しい発音とは違っていることもあるだろう。購買者の諸氏よ、本書は教科書ではなく、いくらか日本語を使って会話の便宜をはかるだけのものである」と述べている。

前二つの会話書に比し、やや内容が充実しているのは、1936-38年にタイ海軍から日本に派遣されて、日本で建造した4隻の潜水艦の運行訓練を日本語で受けた(そのため日本語も並行して学習した)タイ海軍将校二人の手に成る日本語学習書である。二人の海軍将校とは、ミン・ブンスパー海軍大尉 (มิน บุญยศุภา) とジャラット・ドゥアンウライ海軍少佐 (จรัส ดวงอุไร) である。

この潜水艦訓練のために、1936-38年に2年もしくは1年半に亘って125名前後のタイ海軍の士官・下士官が日本に滞在し、技術訓練とともに日本語を学んだ。これは、タイ人に対する最初の大規模で組織的な日本語教育であったと行うことができる。

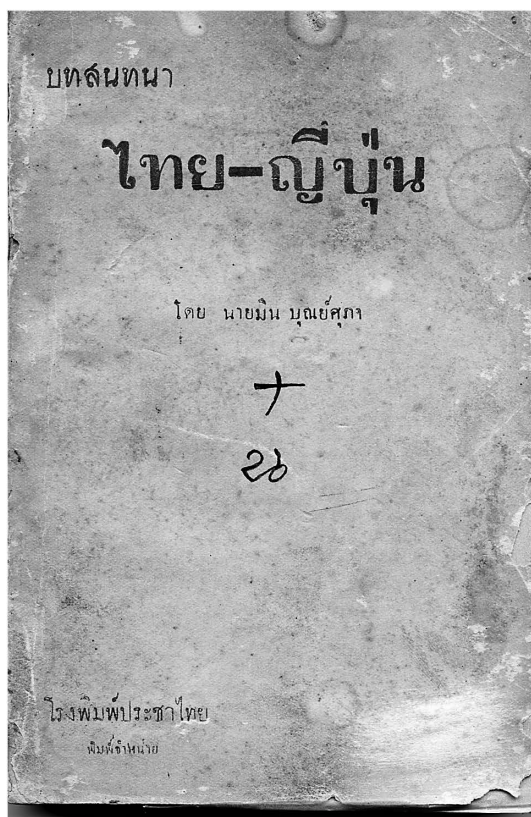
1936年6月12日に、第一陣として、三菱神戸造船所で建造中の潜水艦(4隻)に乗り組む予定の士官13名、水兵34名が、那智山丸で神戸に入港し、神戸日暹協会から歓迎を受け、同日夕刻に千



写真⑤

千葉県船橋に向かって出発した。続いて1937年2月3日に、第二陣として、潜水艦乗組士官4名〔タイ側資料では9名〕、水兵71名が、那智山丸にて神戸に入港し、神戸日暹協会の歓迎を受けた（『昭和11年度神戸日暹協会事業報告』、外務省記録I.1.10.0/2-14「暹羅協会関係」）。

第一陣は1936年6月13日から10月25日までの4ヶ月半、千葉県船橋で、日本語と技術面の教育を受けた。日本側は、暹羅国海軍留学生首席指導官、海軍大佐八代祐吉（やつしろ・すけよし）を長とし、日本海軍潜水艦乗組員らによる技術指導のほかに、日本語を教えた。タイ側の評価では、潜水艦技術と日本語の教育は短期間で極めて良い成果を挙げた、という。第一陣は、4ヶ月半後船橋から神戸の造船所近くの三菱の2階建ての大きな寄宿舍兼教室（林田区小松通）に移り、ここに第二陣が加わった。神戸でも潜水艦教育と日本語学習が並行された。寄宿舍の裏にはテニスコートがあり、造船所の運動場ではサッカー、近所で柔剣道も習うなどスポーツも盛んに行われた。技術指導の末期には潜水艦の実物大の木製模型で訓練を受けた。1937年9月4日に最初の2隻（マツチャーヌ号、ウィルン号）が竣工し引渡が行われた。この日を記念してタイ海軍では、9月4日を潜水艦記念日として毎年食事を開いている。1938年4月30日には残る2隻（シンサムット号、プラーイチュムポン号）の引渡が行われた。完成した4隻を用いて訓練が行われた後、4隻は1938年6月5日に日本を出航し、基隆、マニラを経て6月29日にバンコクに到着した（暹羅海軍宿舎編纂『暹羅国海軍潜水艦乗員日本留学記念、自昭和11年6月至13年5月』1938年5月31日発行、及び「タイ海軍潜



写真⑥

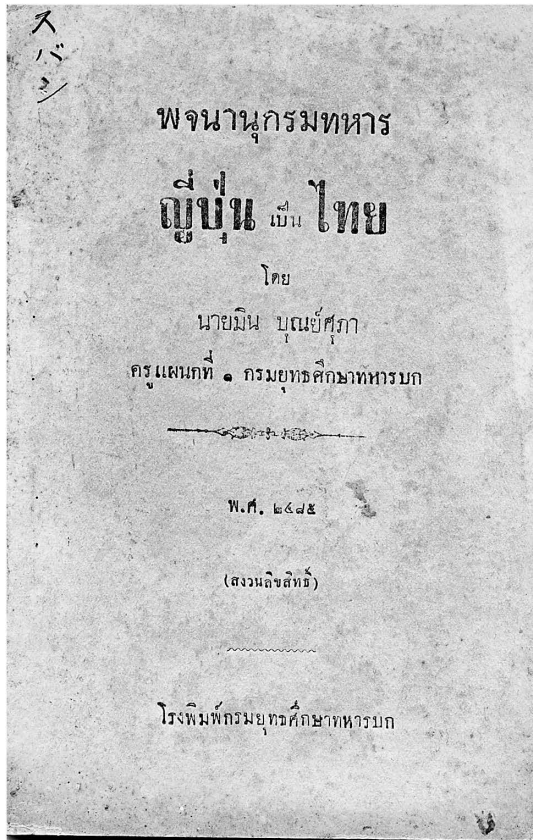
水艦史』、『チン・チュンラスクム海軍大将葬礼記念本』（タイ語）1996年、39-58頁所収）。

さて、ミン・ブンスパー海軍大尉の最初の日本語学習書は、『タイ日会話集 (พจนานุกรมภาษาไทย-ญี่ปุ่น)』（プラチャータイ、1942年1月6日、149頁）(写真⑥)である。

本書前半はタイ語、その日本語訳（タイ文字使用）の順、後半は日本語（タイ文字使用）、そのタイ語訳の順である。著者は前書きで「日本語独習希望者のため、或は日本人との連絡の手助けのために、私の知人やかつて私から学んだ人々が、日本語学習書の編集出版をせき立てている。現在日本語教科書はそれほど普及してはおらず、とりわけタイ人に適した教科書はまだ存在していない。それ故、私は学校で学ぶ機会のない人のために、大急ぎで、必要と思われる単語と会話例文を選び出して編集した。急いで刊行したので、本書には欠陥があるかもしれない。もし、見付けたら知らせて欲しい」と書いている。ミンは当時、陸軍教育部第一班所属の日本語教官であった。

この後、ミンは1942年3月に『日タイ軍事用語辞典 (พจนานุกรมทหารญี่ปุ่นเป็นไทย)』（陸軍教育部、63頁）(写真⑦)を刊行した。本書は日本語をローマ字書きし、タイ語の訳（タイ文字）を付している。

続いて、1942年4月にミンは『日本語教科書 第1巻 文型 (แบบเรียนภาษาญี่ปุ่น เล่ม๑ วิธีผูกประโยค)』（クルンテープパナーカーン、1パーツ25サタン、111頁）(写真⑧)を刊行した。



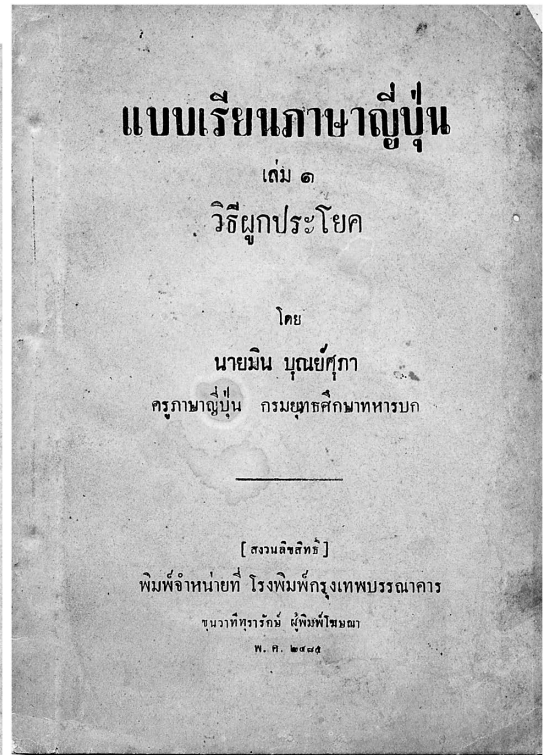
写真⑦

ミンは本書の前書きを、次のように記している。

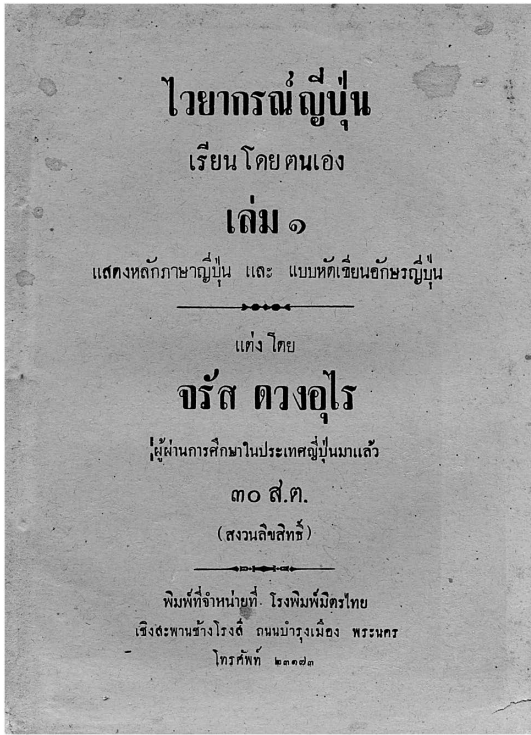
神戸での私の日本語の先生であった K. Noguchi 教授, S. Yoshino 先生及び Y. Yamada 先生の外国人に対する日本語教授法およびその他の日本語教科書（私の日本語授業で手引きとして使用しているもの、それらは、まず最も簡単な文型から説明し、様々な注目点を述べ、さらに次第に難しいものに至る）に従って、日本語学習者の利益のために本書を編集した。

中には、日本語の教科書なのに日本の文字を使用せず、ローマ字を使用するのはどうしてなのかと疑問をもつ人もいるだろう。しかし、これらのローマ字は、日本の文部省が定めたローマ字の書き方読み方の原則に従っているので、日本語の一種と見做すことができる。ローマ字で書いた日本語は商業、行政、外国人との連絡で広く用いられ、中レベル以上の知識ある日本人ならばローマ字をよく理解できる。加えて、外国人に教えるために作られた様々な日本語教科書はローマ字と日本文字を併記しており、辞書類もローマ字を用いている。

もう一つには、学習初心者は先ずローマ字と片仮名、平仮名を併せて学ぶことが望ましく、それから徐々に漢字を学ぶという順序になる。



写真⑧



写真⑨



写真⑩

上記引用のように、ミンは神戸で日本語を日本人教師から学んだとして、3名の教師の名を挙げており（但し、泉虎一<sup>8</sup>には言及がない）、かつ、「タイ海軍潜水艦乗組員一覧（1937年9月4日-1996年9月）」の21番目にミン・ブンスパー海軍大尉の名が記載されている（前掲『チン・チュンラスカム海軍大将葬礼記念本』1996年、88頁）ことから、ミンは1936-38年にタイ海軍が潜水艦訓練のために日本に派遣した海軍士官の一人であることが判る。

タイ海軍が潜水艦訓練のために派遣した、もう一人の将校ジャラット・ドゥアンウライ（最後は海軍少佐、1971年死亡）は、1942年に『独習日本語文法 第1巻、第2巻（ไวยากรณ์ญี่ปุ่น เรียนโดยตนเอง เล่ม๑ เล่ม๒）』（ミットタイ、第1巻は32頁、30サタン、第2巻も32頁）（写真⑨、⑩）を刊行した。第1巻の「はしがき」でジャラットは次のように述べている。

一人で読んで理解できる日本語の基本書を、日本語に関心をもつ人やこれから学習を始めようとする人のための学習補助手段として編集して欲しいと、多くの友人や知人たちからせがまれている。現在既に、日本語会話ハンドブックの類がいくつも刊行されてはいるが、初心者が繰り返して暗記すべき例文は十分ではなく、日本語の発音もあやしいものがある。これが、学習者の困

<sup>8</sup> タイ海軍潜水艦訓練生に日本語を教えた泉虎一（西山浄土宗総本山光明寺塔頭安楽院住職）については、伊藤孝行「タイ日本語教育史一片：『埋もれた学者』泉虎一とことば」『ことばと文字』（日本のローマ字社）第2号、2014年秋号、65-74頁に詳しい。

難を一層増している。

このように考えると、刊行要望に応じざるを得ない。本書は日本語の普及にも役立つことができるだろう。本書は限られた時間に急いで作成したものであるから、欠陥や間違いがあるのは当然であろう。有識者諸氏が、本書の誤り等をご教示して頂ければ、大変ありがたい。

ジャラットは1937年に神戸で購入した、小笠原長生著、井上十吉・井上当蔵訳 *Life of Admiral Togo* (西東書林, 1934) を、タイ語に全訳してプレービタヤー書店から1966年に刊行した。海軍少佐の肩書きをもつジャラットは同書を暹羅国海軍留学生首席指揮官八代祐吉大佐(戦死後中将, 1942年マーシャル諸島で戦死<sup>9)</sup>)に捧げている。これからジャラットは1936-38年に、日本で建造中の潜水艦運航訓練のため日本に派遣され、日本語教育も受けたことが判明する。ジャラットの名は潜水艦乗組員物故者リストの42番目にも記載されている(前掲『チン・チュンラスクム海軍大将葬礼記念本』1996年, 89頁)。

1942年には、もう一人、元日本留学生でタイ王族のモームチャオ・チャンタナーコーン・ウォラワン(หม่อมเจ้าจันทนากร วรวรณ, 1915-1963, 日本ではチャンタナカラ・ワラワンという名で知られる)が、『日本語教本 速習(แนวสอนภาษาญี่ปุ่น วิธีลัด)』(1942年2月, 145頁, 3パート) (写真⑩)を「日本語通信教育事務局(バンコク私書箱147号)」という連絡先を付して刊行した。

本書はローマ字で日本語を書き、続いて英語訳を付し、部分的にタイ語の短い説明を加えただけの代物で、日英会話帳と言った方が正確であり、英語力が一定以上ない者には意味不明である。チャンタナーコーンの異母兄ワンワイタヤーコーン(1891-1976, 以下ワン親王)は、内閣顧問の任にある有力者でタイを代表する知識人でもあったが、同書に序文を寄せて曰く、

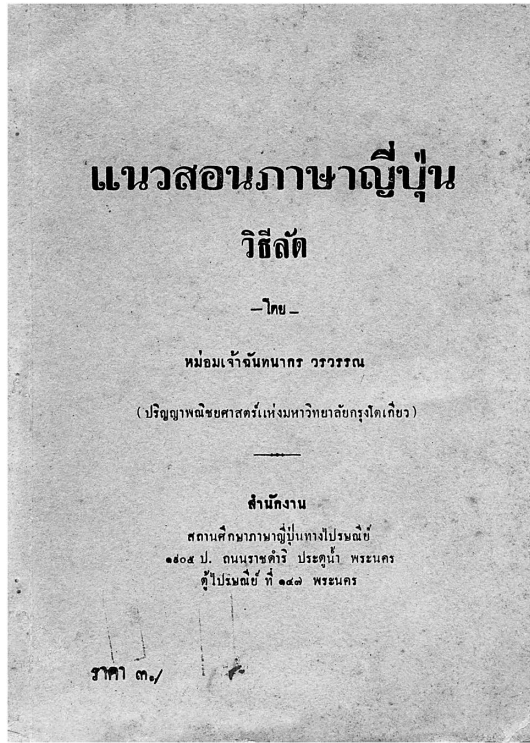
現在、日本語学習希望者、とりわけ会話だけを学びたいという人が多い。通常の会話に必要な単語は500語くらいであるが、日本語の文型はタイ人には複雑で解りにくい。販売されている会話本は、文章を示すだけで構文の作り方を説明していないので、単語の一つ一つの意味や構文内での役割が理解できない。

さて、東京商科大学を卒業したモームチャオ・チャンタナーコーン・ウォラワンが日本語会話練習帳を執筆した。本書は日本語学習希望者を大いに満足させることだろう。構文の作り方が説明され、日常生活で常用する表現が選び出されているから。日本語の発音をローマ字で示した後英訳し、簡単なタイ語で説明を加えている。タイ語文法用語の使用も最小限に止めている。読んで分かりやすいものと思う。

本書は英語力のある読者向けに当面の必要に応じたものであり、更に普及させるためには筆者に日本語タイ語版を執筆して欲しい。その新著では日常生活の用語を場面に応じて、地理、家庭、商業、政治、社会、法律等々に分類した方がよいだろう。

本書の刊行を歓迎する。我々の同盟者である日本人との交際に役立てる目的をもって、日本語学習を始めようとする人(私もその一人だが)に推奨したい。1942年2月15日

<sup>9)</sup> 山口武「泰国潜水艦の恩人 故八代海軍中将閣下を憶ふ」『日本タイ協会会報』第31号, 1942年12月, 32-35頁参照



写真⑩

著者のチャンタナーコーンは、1915年生まれ、バンコクのテーパシリリン校に1925年に入学、更に1928年にスワンクラブ中学に学んだ。スワンクラブでは、ジャーナリストのスパーク・シリマーノン（1914-1986）と同期であった。1933年6月に来日して（外務省記録K3.7.0.14）、1937年には立教大学商科に在学中で国際学友会より奨学金を与えられている（『外務省文化事業部、昭和12年度執務報告』190頁）。

チャンタナーコーンの立教大学学生時代、1936年半ばに日刊タイ語紙ネーション（プラチャーチャート）紙主筆クラブ・サーイプラデットが視察のために来日<sup>10</sup>し、チャンタナーコーンの目黒の下宿に同宿したことがある。ネーション紙の所有者は、ワン親王夫妻であったので、ワン親王がクラブを弟のチャンタナーコーンに紹介したのであろう。小説家でもあるクラブは帰国後、シーブ

<sup>10</sup> クラブは、1950年3月26日付けの論説「教養ある政治」（タマサート大学クラブの雑誌 Thamachak Vol. 2 no. 3, May 1950, pp. 123-129）で、タイでは大学生は未だ生徒扱いで教えられたことを暗記するだけであり、自分で自発的にリサーチをすることはしない。それ故、大学図書館を利用する学生も殆どいないという話をした後、「十数年前、私は東京の早稲田大学を訪問し、同大学図書館で長時間を費やした。図書館は広大で、いくつもの言語で書かれた、様々な分野の本が、数多くの部屋に配架されていた。纏まって寄贈を受けた本は文庫として集められている。広い閲覧室は、学生で満ちている。部屋は静まりかえっている、人は、そっと歩かなければならない」と、訪日時及早大図書館利用について書いている。



ラパーの筆名で名著『絵の裏』<sup>11</sup>をネーション紙に連載したが、『絵の裏』執筆にはチャンタナーコーンとの東京での交流が一つの契機になっていると思われる。

その後チャンタナーコーンは、東京商科大学（現一橋大学）に転じ、1938年に貨幣・金融論の高橋泰蔵（後一橋大学学長）のゼミに入った。1940年3月に東京商科大学を卒業し、40年5月1日から日本銀行で実習を開始し、太平洋戦争勃発前に帰国した。彼は8年間日本に留学したことになる。

チャンタナーコーン（日本ではチャンタナカラと表記）は、1942年4月に日本語通信教育学校を開設した。その様子は、彼が朝日新聞1942年12月10日、11日朝刊に寄せた、次のような手記（上、下）から窺うことができる。

### 「南方・日本語普及の1年 チャンタナカラ・ワラワン（上）／日本を知る為に」

大東亜戦争の輝く戦果を現地に見て日本の偉大な力に感動した私は、その後も引き続き大戦果を日毎耳にしながら、日本とともに戦ふタイ国にあつて、日本語の教授に尽きぬ感激をもつて当っている幸福を、まづ日本の皆様に御報告しなければならない。

私が日本語通信学校を開設するに至った動機といふか、決心を述べると、

中学の五年生のとき私どもの先生が留日八年の体験から得た日本の歴史、風習、言語などについて毎日話を聞かされ、雄国日本の美しさに憧憬を覚えるやうになつたが、ついで日本に渡り知人のお世話になつて家族と同様の生活をし、日本の家庭生活の温かさに直接触れることが出来て忘れ得ない印象を私の胸に刻んだ。

昭和十五年春東京商大を卒業してから約一年東京の銀行に勤めていたが、昨年大東亜戦争の勃発前に帰国した。当時の米英の対日包囲陣の狂噪のしぶきを浴びてわがタイ国は中立維持に躍起となつている最中であつた。

昨年十二月大東亜戦争の勃発は日本の実力をわれわれの眼前に大写しにしてくれた。同時にタイ国の日本との共同戦線が結成され、東亜の盟主日本とタイ国との強い強い契りが結ばれたことは私にはつきりした決心をさせてくれた。

タイ国は日本を知らねばならぬ。日本を知るには、どうしても言葉を理解しなければならない。ところがその機関が一つもない。微力ではあるが、私がまづ学校を開いて、近きより遠きに及ぼすことにしようと考え今年三月から開校準備にとりかかつた。兄のワラワン [ワン親王] 殿下も大いに賛成してくれて、四月から通信教授を主にした日語学校を始めることになつた。

生徒はバンコックまたは地方にいて通信教授を受けているものが目下約百五十人いるが、このうちには空軍の将校をはじめ商人、学生が大部分で、いろいろの課題にたいする答案を郵便で送つて来て、それを添削してやるが、なかなか熱心に勉強するものが多い。

また日曜日毎に約四十人の中等学生に直接教へているが、これは若くはあるし、記憶力旺盛な時期だし、舌の動きもなめらかで、もうあと一年もすればモノになると思はれるほどの上達ぶりだ、教へる私としても大へん感激して教授に当つている。

教科書は私の考案によるプリントを使用しているが、まづ会話に必要な簡単な文章を示し、日

<sup>11</sup> シーブラパー著『絵の裏』の日本語版は、小野沢正喜、小野沢ニッター共訳で1982年11月に九州大学出版会から刊行されている。

本文の構造を英語、タイ語などと比較して、わかりやすく説明し、それに日常の単語をいろいろとあて嵌めて行く。

発音はまづア、イ、ウ、エ、オの五母音をしつかり教へこんでおく。直接教へる生徒には間違つた点は、すぐその場で発音の誤りを正せるのでいいが、通信による生徒は発音教授の点で遺憾のところが多く、これについては将来日本語教授のレコードを自分で作るか、あるひはまた他より入手してこれを頒布して、その上達に資したいと考へている。

筆者チャンタナカラ・ワラワン氏は手記にもある通り、日本に馴染の深いワラワン殿下の実弟で、日本留学八年、東京商大を卒業して昨年帰国、目下泰国商工省に勤務。

### 「南方・日本語普及の1年 チャンタナカラ・ワラワン（下）／量より質」

単に言葉を覚えて、これを流暢自在に話すといふことだけでは現在の日泰親善関係からいつて、また将来日泰間の親睦を計るといふ点からいつても甚だ物足りないと思はれるので、私は生徒が日本語を覚える傍日本といふものについて、その真の姿を、いささかでも掴むことが出来るやうに努力している。この点私は日本語を話すものの量的増加より質的向上を狙つているのを誇りを以て御報告出来るよろこびを持つている。

期間は読み書き併せて二箇年としているが、その間会話と筆記が十分出来得るやうにあらゆる方法を考究して生徒の上達に遺憾なきを期している。タイ国語をわがモノにしていなくては、たとひその人が日本語を学んで、いくら上達しても完全な翻訳も出来得ないやうでは真の共栄圏の建設には役立たないことは分り切つたことである。立派なタイ人が出来上つて、その人が優れた日本語を話せるやうになることが私の大きな希望でもある。

一般人としては商人、学生などで日本語習得希望者が、かなり数へられるが、商人など近づく共栄圏貿易時代のためにも先づ正確な日本語を話せるやうになつておく必要があり、学生は将来のタイ国を背負つて立つものとして優秀な分子にならなくてはならず、朝野の各分野における、かうした日本語習得希望の発芽をすくすくと伸びさせてやりたいと思ふのは私一人の考へではないと思ふ。

東亜の盟主日本の指導の下に建設される大東亜共栄圏の構想のなかに、日泰両国の占める特殊な地位を考へると、前にも述べたやうに、タイ人で日本語を話すものの数が殖えるといふことだけでは駄目である。深い堅い日泰の契りに更に根強いものを打ちこむためには、どうしても優秀なタイ人の日本語習得者の殖えることである。問題は質だと確信する。日本をもつともつとよく知ることです。

私はこの考へを堅持して日本語を教へると同時に、日本事情をも併せて教授することを今後とも続けて行く決心です。

ところが、兄のワン親王は、弟チャンタナーコーンが8年間も日本に留学したにも拘わらず、十分には日本語を使えないことに大変不満で、日本の留学生教育を批判している。それは次のように、在タイ坪上大使 1943年5月31日発、青木大東亜相宛の第947号電「留日学生待遇問題」に見ることができる。

タイ国官庁の留日帰国学生差別待遇に対しては之が改善方折角工作中なるが本件に関し最近ワンワイ殿下〔ワン親王〕は館員に対し左〔下〕の如く語りたる趣なり。

タイ国政府は日本留学生を冷遇する意図全然なし但し日本の学校に於ては留学生の大部分は日本語を充分習得せざる上殆ど登校し居らざるに拘らず席さへ有れば特別生として卒業証書を下付し居る故實力に於て欧州留学生と比較し難き状態にあり。現に自分の弟（チャンタナカラ・ワラワン）は商大〔東京商科大学〕を卒業し国立銀行に推薦したるに拘らず銀行業務に堪へ得ず遂に映画事務に転身せり又在京大使館チャラオ三等書記官は日本の大学（中央大学）を卒業し居るも大学卒業者としての学力なし。只其の性質良好なるを以て特に文官登用委員たる自分は彼を外務省に推薦せるも彼は将来局長に迄なり得る能力の持主にあらずと思考す。又目下日本留学生中に日本新聞論調を解説し得るものは一人も居らざる次第なり。依て自分は日本学校当局に外国人学生に対する特別的温情主義を廃し日本学生と同様の取扱を望むと共にタイ側に於ても是等学生に充分日本語をマスターせしむる為幼時より少なく共十年前後日本語勉強の機会を与ふる必要ありと認む（了）（外務省記録 I.1.2.0/3-1）

ワン親王のこの評価は、自分の弟および外務省に採用した人物（チャラオ・サミッタウェート）を根拠としたものであり、タイ人留学生も、個々に能力および意欲が異なり、2例だけからの一般化は危険である。中には優秀な人材もおり、桐生高工では助手に採用された者もいるし、医学でも優秀な者いる。日本留学は総じて失敗だ、というのは言い過ぎであり、ただ、ワン親王の弟の意欲・能力が足りなかつただけではなかろうか。ワン親王は自分と先妻との間の息子、ウィブーンを、1942年に日本に政略的に留学させ、大東亜会議直後に帰国させているが、この息子は学習院の中等科に一学期在学しただけで終わった。

### III 三木栄（ワタナー・トゥリーブルックパン）著の5種の日タイ語学習書（1938-1943）

タイ人著者の日本語学習書の他に、三木栄（1884-1966、1939-45年タイ国籍、タイ名ワタナー・トゥリーブルックパン）がバンコクで、日本人・タイ人のタイ語・日本語学習者向けに多くの著作を刊行している。三木の語学関連著作に関する、既存研究は極めて少ないので、ここで三木栄の経歴と、筆者所蔵の三木の日タイ語関係著作5種類について紹介して置きたい。

#### 三木栄の経歴

三木栄は、1884年4月29日に群馬県前橋市栄町に生まれた。

『東京美術学校一覧従明治四十三年至明治四十四年』（明治44年1月23日発行）154頁に「三木栄、群馬士」は明治43（1910）年3月漆工科本科を卒業と記載がある。これから三木栄は、本籍群馬県、族籍士族であることが判る。更に、同書117頁によれば、1910年11月30日の調査時点で三木栄は研究科（漆工科）に在籍している。

研究科は卒業後の大学院に相当するものである。上記東京美術学校一覧では、三木栄を含む32人が研究科に在学している。内二人は暹羅（タイ）人である。本一覧には、開校以来の卒業生・在学学生名が記されているが、外国人はアメリカ人1名の他には、この2名の暹羅人しかいない。その一人は

明治43年3月に漆工撰科を卒業し、研究科で漆工を研究しているポンプー・ワナート、もう一人は研究科で金工を研究しているチャルン・スラナートである。

ポンプー・ワナートの名は、『東京美術学校一覧 従昭和8年至昭和9年』では、ボン・プワナーと修正されている。何れにしても、東京美術学校を1935年までに卒業したタイ人は、ボン・プワナー（明治43年3月漆工科選科卒業）、チャルン・スラナート（明治43年3月金工科選科卒業）の2名のみである（『東京美術学校一覧 従昭和8年至昭和9年』166, 173頁）。

この二人のタイ人男子学生は、1902年末から1903年初に日本に立ち寄って帰国したワチラーウット皇太子（後のラーマ六世王）の勧めでサオワパー皇后が日本に美術学習のために留学させた男子4名、女子4名、合計8名中の二人である。男子4名はワチラーウット皇太子の近習であった少年で、ポンはモムラーチャウォン・ポーイ マーラークン（プレイヤー・テーワーティラート）であり、チャルンは、チャルン・サワディチュートー（プレイヤー・ノラテーププリーダー）であると思われる。ワチラーウット（ラーマ六世）が即位すると、二人共宮内省の官吏として活躍した。

当時の東京美術学校の入学資格は、中学校・師範学校卒業後予備科の試験に合格した者である。美術及び美術工芸に従事する専門技術家を養成する本科は5年制で日本画、西洋画、彫刻、図按、金工、鑄造、漆工の7分科から成っていた。本科と同じく5年制であるが専ら実技のみを教える選科も併設されていた。本科・選科の卒業生にして尚技術を深めようとする者のために研究科が置かれていた。この他に本科・選科とは別コースで、普通教育の図画教員を養成する3年コースもあった。

前述のように『東京美術学校一覧従明治四十三年至明治四十四年』によれば、1910年11月30日の調査時点でポンとチャルンの二人の暹羅学生は、選科研究生である。この時、三木栄は研究科（漆工科）に在籍していた。序でながら1915年10月に渡暹のため旅券の下付を受けた佐瀬芳之助（1889-1960）は彫刻選科の3年生であった。

三木栄は1911年2月15日にバンコクに到着したが、「其日から同窓の漆工選科卒業生の皇族（国王の従弟）の邸に寄寓し普通の邦人はとても食べられないといふシャム料理を食べながらシャム語の研究に没頭し始めた。これが自分のシャムに根を下す始めであつた」（三木栄「自叙録」6頁、『山田長正の真の事蹟及三木栄一代記』1963年刊、所収）と回想している。ここにいう漆工科選科卒業生はポンのことである。ポンは国王の従弟ではないが、彼の祖父バムラープボラバック親王（ラーマ二世の王子）は、ラーマ五世王（チュラーロンコーン王）初期において同王が最も信頼した王族であった（前掲村嶋英治編集・解説『天田六郎氏遺稿、「シャムの三十年」など』283-284頁参照）。

これから三木のタイ渡航の契機となったのは、東京美術学校での二人のタイ人貴族留学生との出会いであったと考えられる。

外交史料館所蔵の旅券下付表（マイクロフィルム、リール旅64）によれば、三木栄は、1910年9月12日に東京府で旅券を下付された。下付表には、旅券番号162099 三木栄（身分 戸主、本籍地群馬県前橋市一毛町20、年齢26歳6ヶ月）の旅行地名は暹羅、渡航目的は「漆工業改良顧問及同業視察」と記載されている。

三木は1911年1月19日に常陸丸で神戸を発ち（三木栄「五十年前の回顧」『泰国日本人会創立五十周年記念号』1963年9月発行、21-22頁）、1911年2月15日にタイに到着した。

1935年10月30日付で矢田部駐シャム公使は、廣田弘毅外相宛てに機密公第372号公信を送り

シヤムにおける大本教信者について報告したが、その中で三木栄は大本教の人類愛善会盤谷支部（支部長 大山周三，次長日高秋雄）の委員の一人であるとして、三木について次のような辛辣な評価を下している。

### 三、委員 三木栄

本名原籍は東京市小石川区高田老松町 34 に在り東京美術学校漆工科卒業後明治 43 年〔正しくは 44 年〕2 月渡暹し当国宮内省に傭はれ仏閣、仏像の修繕等に従事し現在は文部省所管美術工芸学校傭教師として漆工技術を教授し居れり、本名は渡暹後往昔に於ける日暹交通史実の研究に興味を覚え主として右〔上〕に関する本邦の文献を渉獵し二三の著書も有り殊に其の有する暹羅語の智識に依り暹羅語の発音を漢字にて表はしたる古文書を解説して日暹交通史の研究に多少の貢献を為したることは事実なり爾來本名の虚栄心次第に募り昨年守屋武官<sup>12</sup> 来任後は同武官とは形影の如き緊密なる関係を結び其の傀儡と為りて当館の鞅掌する在留邦人関係事項に付陰に廻りて容喙し又守屋陸軍武官、現在日本人会長小川蔵太と策謀し当公使館の方針を無視する行動に出づる等甚面白からざる人物なり（外務省記録 I.2.1.0/2 「各国に於ける宗教及布教関係雑件第二巻」）

一時帰国した三木栄（戸主，群馬県前橋市一毛町 20 士族，33 歳 9 ヶ月）は，1917 年 12 月 24 日に東京府でシヤムに帰任する目的で旅券の下付を受け，19 歳 5 ヶ月の妻ワサ（1898 年 8 月 6 日生）を同伴してバンコクに戻った（外交史料館マイクロフィルム，リール旅 86）。更に，三木栄（戸主，本籍地東京市小石川区高田老松町 34）は，1931 年 1 月 8 日に帰任のため東京府で旅券の下付を受けたが，この時も妻ワサが同伴している。

三木は，1929 年 12 月 31 日付けで，Rong Ammat Tho (รองอำมาตย์โท) の官位（ヨット）を授与された（『タイ官報』46 巻，3688 頁，1930 年 1 月 19 日号）。この官位は軍隊で言えば中尉クラスである。三木の場合は官位（ヨット）だけで，官爵位（バンダーサック）は授与されていない。もし，このヨットでバンダーサックを得るとすれば Khun レベル（Luang は大尉レベル）である。

1937 年当時の三木について，バンコク発刊のバンコクタイムズ年鑑は “Miki, S., chief of Industrial Arts Section in Fine Arts School, Ministry of Public Instruction” (The Directory for Bangkok and Siam 1937-38 (B.E. 2480) p. 508) と記している。

1937 年 12 月に，外務省文化事業部の斡旋により大日本仏教青年会聯盟などの訪暹使節団の一人として来暹した浅野研真は，「美術学校部長三木栄」の世話になり，1937 年 12 月 15 日には，「ホテルへの帰途，ラージャタムノエン [ラーチャダムノーン] 街の瀟洒たる三木氏のお宅に立寄り，おいしいザボン（暹羅の名産ださうだ！）などを饗せられ。そして種々快談の間に，我が求法南進の一大先駆たる真如法親王の奉賛の件に就ては意見の一致を見て，大いに愉快に感じた」（浅野研真「暹羅訪問紀行」『暹羅協会会報』第 11 号，1938 年 6 月，93, 95 頁）。

<sup>12</sup> 守屋精爾（1895-1943，陸士 29 期，陸大 41 期，フランス参謀学校 (Ecole Supérieure de Guerre) 卒）は，1934 年 3 月 20 日-1935 年 4 月 1 日在タイ陸軍武官（非公式），1935 年 4 月 1 日-1936 年 8 月 1 日在タイ陸軍武官。当時の外務省と軍部との間の対立もあってか，矢田部公使と守屋武官の関係は険悪であった。

間もなく三木は、タイの官吏を退職した。1938年4月17日から5月1日まで、第一回神戸岡崎忠雄招致タイ学生日本見学団の通訳兼案内人として三木は日本に滞在し、帰暹前の38年5月2日には前任者辞任の後をうけて、暹羅国日本人会会長に選任され39年4月まで在職した。

三木は1938年末から42年にかけて日泰文化研究所付属盤谷日本語学校に教師として勤務した。同研究所初代主事星田晋五と職員の高宮太郎が対立したため、二人共罷免されてしまった後、第二代目主事として赴任し、三木栄の上司となった平等通照(1903-1993)は、三木から様々に世話になり、また多くを学んだ。平等は次のように書いている。

着任 [1940年10月25日] するとすぐ、職員 [日泰文化研究所] の三木栄氏 (泰の政府に数十年勤め、漆の伝習をし、研究もして来、泰人の奥さんの間に十三、四の娘があり、泰語は泰人同様に流暢な) が王宮と玉仏寺 (ワット・プラケオ) を拝見する手続を取ってくれました (平等通照・平等昭信『我が家の日泰通信』印度学研究所, 1979年, 44-45頁)。

1931年時まで三木との間に婚姻関係が確認できる日本人妻ワサのその後は不詳だが、1940年末には三木は、上述のようにタイ人の妻及びその間に生まれた13,4歳のむすめと生活していた。三木が1935年12月3日にシャムへの帰化を申請したのは、多分このような配偶者の変化もあってのことであろう。タイ政府が日本人の帰化を警戒したためか、例外的に長期の審査期間ののち、タイ外務大臣が1939年5月31日付けで帰化を許可したことが、『タイ官報』の第56巻, 559頁 (1939年6月5日号) に布告された。

しかし、日本の敗戦後、タイ名ワタナー・トゥリーブルックパン (นายวัทนา ตรีพฤกษ์พันธ์) の三木栄は、シャム国籍を捨て日本籍に戻ることを自己申請し、シャム政府はこれを1945年9月15日付で許可し、官報公示の日 (1945年10月2日) から有効となった (『タイ官報』第62巻, 1459頁, 1945年10月2日号)。

以上の三木栄の経歴は、村嶋の調査に基づくものであるが、2019年7月14日の日本タイ学会研究大会 (日本女子大学開催) で、高田知仁氏は丹念な調査に基づいた報告 (「三木栄の事跡を追って」) を行った。高田氏の研究成果の公刊が待たれる。

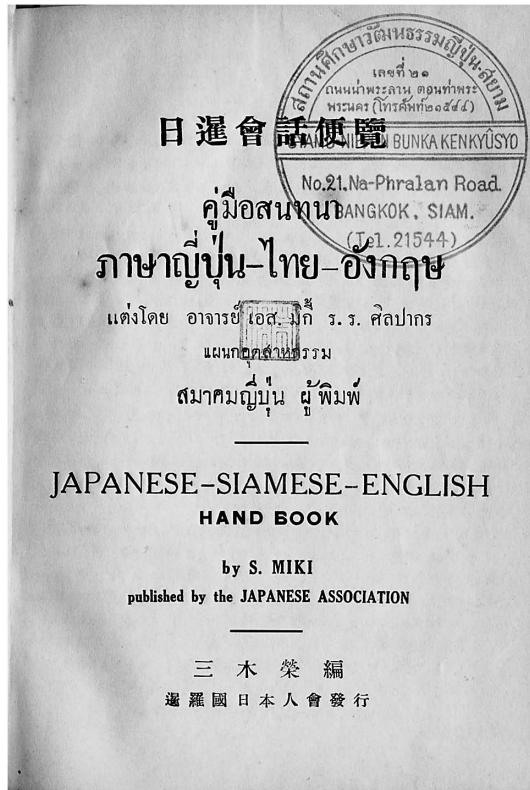
### 三木栄著作の日本語タイ語学習書 (1938-1943)

三木栄の手になる日本語タイ語学習書で、筆者が所蔵するものは次の5種である。前出の Union Catalog Thai Academic Libraries と WorldCat で検索する限り、ここに掲げる5種は、タイの大学図書館及び世界の主要図書館 (日本を除く) のどこにも所蔵がない。

① 三木 栄 (อาจารย์ เอส. มิกิ ร.ร. ศิลปากรแผนกอุตสาหกรรม S. Miki) 編『日暹会話便覧 (คู่มือสนทนาภาษาญี่ปุ่น-ไทย-อังกฤษ) Japanese-Siamese-English Handbook』昭和13年2月、暹羅国日本人会 (สมาคมญี่ปุ่น, Japanese Association) 発行, 80×2 プラス2頁。

本書表紙 (写真⑫) の日本語タイトルは日暹両語のみだが、タイ語・英語の両タイトルは日暹英と三語が記されている。

本書は、冒頭に片仮名・平仮名及びその読み方をタイ文字で示した一覧表、タイ文字とその読み方



写真⑫

を片仮名で示した一覧表を掲げている。続いて、一例文或は一単語について、漢字交じりの通常日本語、片仮名のみによる日本語、タイ語訳文の読み方を片仮名表記、日本語の読み方をタイ文字表記、タイ語訳文をタイ文字表記、英訳語の順序で6列に記載している。6列に記載するためには通常の1頁分では紙面が足りないので、見開左右二面（通常の2頁分）を用いている。見開左右二面を1頁と数える特殊な頁建て計算で80頁、即ち通常の計算では160頁分である。

本書の日本語の「はしがき」（活字印刷ではなく肉筆凸版印刷）で三木は次のように述べている。

日暹両国の往復日に日に繁くなるに従つて両国人にとつては彼我の国語の必要を感じるのは当然である。往古は扱っておき明治以来五十年の国交あるに係らず邦人来暹者に対しての会話書すら未だに一冊もなく来暹者の不便一方ならぬ次第である。私は是を遺憾に思つておつたことは年久しいことである。然るに正式に暹羅語を研究したものは、かかる著書の企てなく、却て私如き唯永年在暹したといふだけで、技術家である為当初正条なる暹羅語を学ばなかつた者が、こんな大それた企てをしたのは、少しでも日暹両国の親善を促進する一助ともなれば好いといふ老婆心に過ぎないのである。

昨年三月二十日稿を起し九月三十日迄半歳を閲して、会話編単語編日暹辞典等千余頁分を脱稿したが之を一冊子にして刊行するのは余りに大部となり当地では邦文活字の不便などもあつて難

事業故不取敢日暹両語併せて百六十頁の会話便覧を日本人会から発刊することになり昨年十月末印刷所に廻すの運びとなり邦語は十七頁から三十一頁迄憲法祭中多忙の為金井〔純雄〕先生に執筆を願ひし外は全部私が余暇を割いて拙筆を揮つて版下を書き起したもので誠に体裁の悪ひものが出来上つたが、過渡期のものとしてお見通しを願ひたい。

発音並にアクセントは両国語共文字にて書き現はすことは困難であるから初心者の真に発音を学ばんとするものは二、三ヶ月教師に就いて真の発音を修得するの要がある。唯ここでは一時旅行者や用達に便ずる為に近似の発音を記したに過ぎない。

出来上つて見ると筆写の粗漏、製版の拙或は誤植などあり誠に汗顔に堪へないが、御気付の節は宜しく御訂正をして頂き度い。

尚ほ引続き別に大冊の会話編や単語集や日暹辞典などを続々刊行致す故、何卒御声援の榮を賜らば誠に幸甚の到りである。

二十八年前暹の当日に完成したるを悦びつつ

昭和十三年二月十五日 三木栄

また本書のタイ語の「はしがき」(活字印刷)では、次のように述べている。

私が編集した本書、日暹会話便覧はシャムにおける最初のものである。タイ日二言語から成りタイ人日本人の両方が使用可能である。現在暹日関係は以前に比し関係の度を深めている。関係を強固なものにするには、相互にことばを理解する必要がある。本教科書は日本語に関心を有する読者の日本語の知識を増大させる。同時に日本人にとっても、タイ語とタイ語発音を知ることができる。しかし、発音を正確にできるかどうかは読者の努力にかかっている。もし読者諸氏が常に熱心に会話に励めば、うまく話せるようになるだろう。

誤謬は常に避け得ないものであるから、本書にも幾らかはあるだろう。もし読者が間違いに気付かれたならば、どうかご寛恕を請うとともに私までお知らせ頂ければ寔に感謝に堪えない。

尚私は大冊の会話編、単語帳を既に執筆しているので、もし本書が読者の満足を得ることができれば、続刊の予定である。 敬具

エス・ミキ

なお、筆者所蔵本は、1939年3月23日に三木栄が、シャム日本(日泰)文化研究所(Syamu-Nippon Bunka Kenkyusyo)に寄贈したものであり、表紙(写真⑫参照)に同文化研究所印、裏表紙の内側に Bangkok Nippongo Gakko (โรงเรียนภาษาญี่ปุ่น บางกอก) の蔵書印(写真⑬)が捺されている。因みに写真⑭は、三木栄『山田長政之事蹟』(盤谷、江畑洋行、第3版、1943年1月20日発行)の中表紙に捺された第二日本語学校(ナレート路)の蔵書印である。

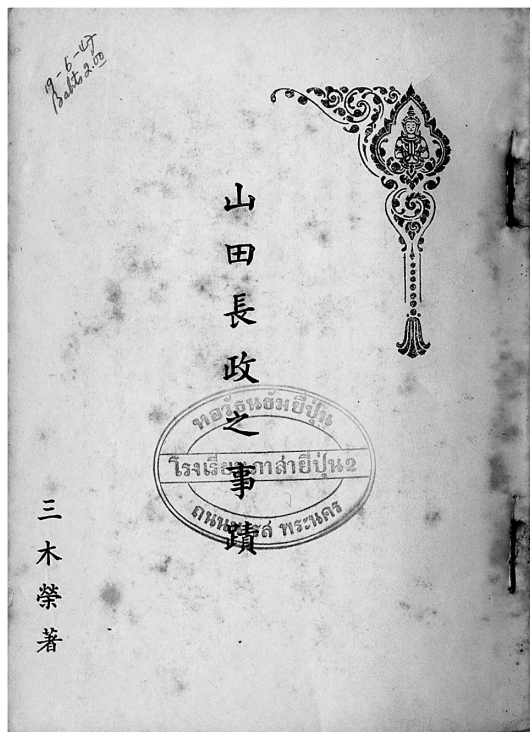
シャムからタイ国への国名変更は1939年6月24日である。文化研究所は、1938年12月21日の開所から国名変更までは、Institute of Siamese-Japan Culture<sup>13</sup>と称した。

<sup>13</sup>「新田義實日記」(村嶋が御遺族の利用許可を得て複写し所蔵)の1938年10月27日の項によれば、新田は日本公使館の依頼によりルアン・ウィットワータカーンに会い、研究所の設立と運営のため、日暹協会の諮問委員会委員長に就任するよ





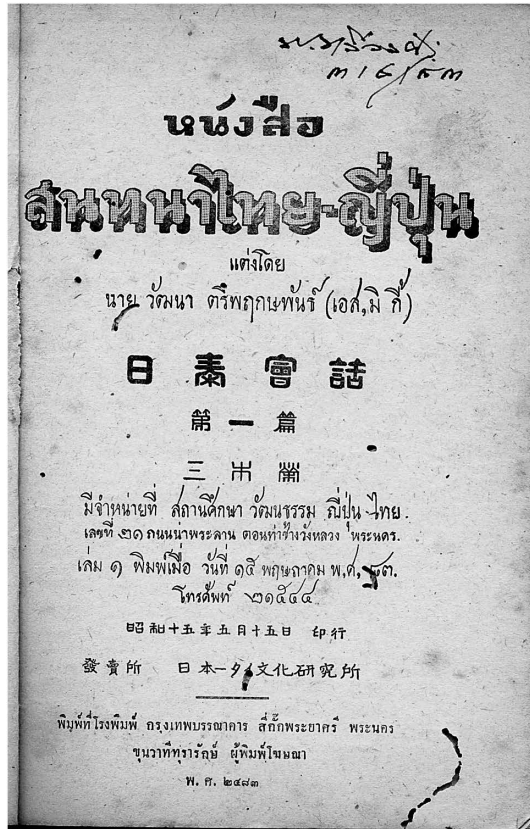
写真⑬



写真⑭

サイニー（CiNii）検索では、本書を所蔵する大学等図書館はないが、国立国会図書館サーチによ

うに要請した。就任したルアン・ウィチットが研究所の名を決めた。1939年6月の国名変更後は日泰文化研究所と称したが、研究所出発時の名付け親はルアン・ウィチットである。



写真⑮

ると、沖縄県立図書館（一ヶ所のみ）が所蔵している。

②三木栄（วัฒนา ตรีพุกกะพันธ์）『日泰會話 第一篇（หนังสือสนทนาไทย-ญี่ปุ่น）』（昭和15年5月15日印行，日本-タイ文化研究所発売，127頁）（写真⑮）。本書は、漢字交じりの通常日本文，片仮名のみによる日本文，泰語訳文をタイ文字表記，泰語訳文の発音をローマ字表記，の順序で，4列に記載されている。

本書執筆時三木は日泰文化研究所所属の盤谷日本語学校で教えており，日本語の「はしがき」（肉筆凸版印刷）に曰く，

非常に不備ではあつたが一昨年拙著『日暹會話便覧』日本人会から発刊し江湖に送つたところ忽ちにして売切れとなつた為今回は当地日本語学校で教へている日本語會話を骨子として「日泰會話入門」とも称すべき小冊子を上梓して泰国人には二三ヶ月間片仮名，平仮名を習得したる者の為に用いらるるやうにし邦人にはローマ綴りの上に調子を矢印で入れ初心の者に便じた。これとても泰国人個々に少しづつ調子が異うし標準を確立することは頗る困難であるから泰音を完全に発音を出すには満足のものでない，唯旅行者や一時在留者の為に物したまでで泰語は頗る微妙

で難しいから真に発音を覚えるには泰字により泰教師の指導を受けるより外に方法はないのである。唯憾むらくは時恰も、欧州動乱の酣なる際とて紙と凸版に使用する亜鉛板と硝酸の大暴騰を来し止むなく小紙面に無理に沢山の文字を詰めた為に小文字となり極めて不体裁となり誠に見悪くなり剰へ眼の悪い編者が老境に入り夜の暗きを忍んで拙筆を揮つて深更に至るまで無数の昆虫軍と蚊軍と闘ひつつ版下を自ら書き起した為に、尚更見苦しくなつたことは幾重にも御寛恕あらんことを祈る。

勿論忽々の際の編纂故見落しの誤謬の点多々あることと信ずるが故に本書を使用せらるる方は若し誤謬や欠点を発見した場合には遠慮なく忠告あらんことを乞ふ精々続編で注意することにする。

此小冊子を編輯するに当り種々の助言を与へ鞭撻してくれた諸賢と泰国美術学校の生徒諸君が編修に対して尽瘁された労に対しては深甚の感謝を表す。

希くは博雅の士の教を得て漸次拙著の増訂完備を計り此事業に向つて邁進して行き度い。願はくは此小冊子を楔となし日泰語の普及促進に少しでも貢献でき両国の親善増進に少しでも役立てば幸甚の至りである。

#### 椰子実る南の国の若人がやまとの言の葉まなぶ床しき

昭和十五年五月 在泰三十年の初夏 三木栄

一方、タイ語の「はしがき」(活字印刷)は、次の通りである。

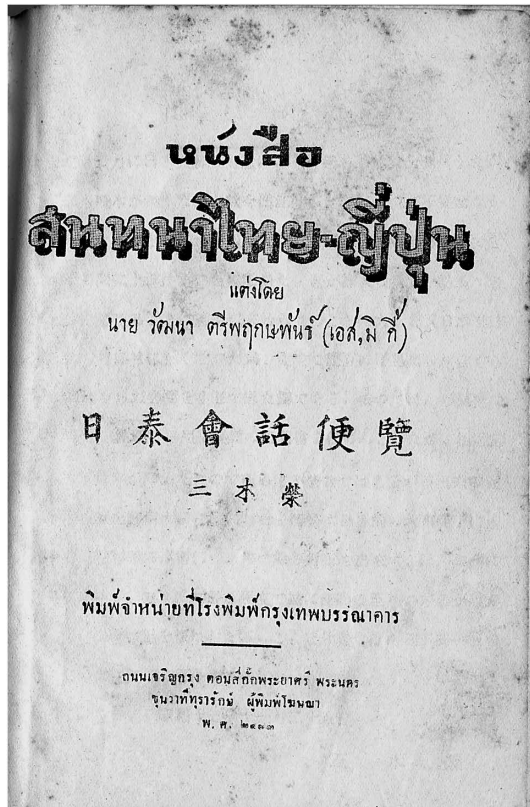
この日泰会話は日本語に関心があり現在学習中の者及び今後学ぼうとする者が、日本語をより広く知る上で役立つように編纂した。この外に、日本人或は外国人が泰語会話を学ぶことができるようにローマ字で泰語の発音を示している。これは泰語会話において大体の発音が判るようにするためである。泰語は母音、子音、声調符号が多数あるので、ローマ字では泰語発音を正確に表記することはできない。泰語にローマ字発音を付したのは、単に泰語をほぼ読めるようにしたまでであり、泰語の正しい発音とは言えないのである。

本書の編集及び出版には多くの困難があった。日本字の活字がタイ国にはないので、一々凸版台(ブロック)を製作する必要があった。本書では単語、母音、子音等が間違ったり、欠落していたりするかも知れない。もし読者が、単語や語句の誤りを見付けたら、ご寛恕をお願いしたい。本編集者は年寄りの上、目も悪いのだから。本書は日本語及び泰語を学びたい人が容易に学べるように、その便宜のために出版し安価で販売しているのである。タイ文字とローマ字の筆記には生徒諸君の協力を得た。ここに協力者に感謝する。

編集者 ワタナー・トゥリープルックパン (エス・ミキ)

ワタナー・トゥリープルックパン(タイ語で「栄える・三本の木」の意)という三木のタイ名は、三木栄の意味に即してタイ語訳したものであるが、彼がタイ名を名乗っているのは、1939年5月31日付けでタイ国への帰化が許可されタイ国籍を得たからである。

本書はサイニー検索では4大学図書館に所蔵されている。また、国会図書館デジタルコレクション



写真⑩

でも公開されている。

③三木榮（วัฒนา ตริภักษพันธ์）『日泰會話便覽（หนังสือสนทนาไทย-ญี่ปุ่น）』（クルンテープ・バンナーカーン，1940年11月，80×2 プラス 52 頁）（写真⑩）。

本書は、見開左右二面の80×2部分については、第6列目の英単語を外して5列とした以外は①と同一である。追加52頁分は、数、助数詞、時間、野菜名、身体名詞、度量衡、日常生活の名詞などを漢字、片仮名、タイ語訳タイ文字表記、声調付きローマ字（又は片仮名）の順序で記している。

日本語の「はしがき」（活字印刷）に曰く、

昭和十三年二月に日本人会の好意により日暹會話便覽を刊行したが最早一部も残本が無くなった故今回江湖の要望によつて不完全ながら自ら再版することにした。現今寸暇なき為、余り増補訂正もできず、忽卒の間に上梓することになった。吾が国人の泰国を訪るる者今日の如く盛なることは明治以来始めてのことである、又日本を訪れる泰人も日に月に繁くなつた為、従つて双互に平易語の片言くらい繰らねばならぬ必要を生じてきた訳である。依つてほんの便覽に供するため、簡単な日用平易語の會話書を作らんとしたが、生憎当地には邦文活字が沢山ないので極めて

不体裁ではあるが不出来の在来の肉筆凸版を応用することにした。時恰も世界的の大事変下に遭遇し亜鉛凸版製版の高価につくので余り訂正も出来ず、ほんの間に合はせに過ぎず、無きには優る程度で誠に汗顔の至りであるが誤謬の点は宜しく御訂正を煩はしたい。こんな片著ではあるが御一読の榮を賜らば誠に光榮の至りである。

昭和十五年十一月二十五日

三木榮

タイ語の「はしがき」(活字印刷)は、②と殆ど同一である。

本書を所蔵する図書館は皆無のようである。

④三木榮(วัฒนา ตรีพฤษพันธ์)『日泰会話便覧(หนังสือสนทนาไทย-ญี่ปุ่น)』(ローンピム・プラチャン, 仏暦2485(1942)年2月10日刊行, 80×2 プラス52頁, 1.5パーツ)。本書は、日本語タイ語両方の「はしがき」を欠く以外は③と全く同一である。

本書の内容については、田中寛「戦時下のタイにおける日本語教育の一断面：三木榮『日泰会話便覧』の構成について」前掲田中寛『戦争・言語文化・記憶：植民地教育史研究の視点から』171-183頁がある。

本書はサイニー検索では一ヶ所に所蔵がある他に、早稲田大学総合図書館にも所蔵がある。

本書を刊行したころ、三木は盤谷日本語学校を退職した。三木に代わって日本人教師に就任したのは、佐瀬芳之助(1889-1960)である。佐瀬については、前掲村嶋英治編集・解説『天田六郎氏遺稿、「シャムの三十年」など』273-276, 284頁を参照のこと。

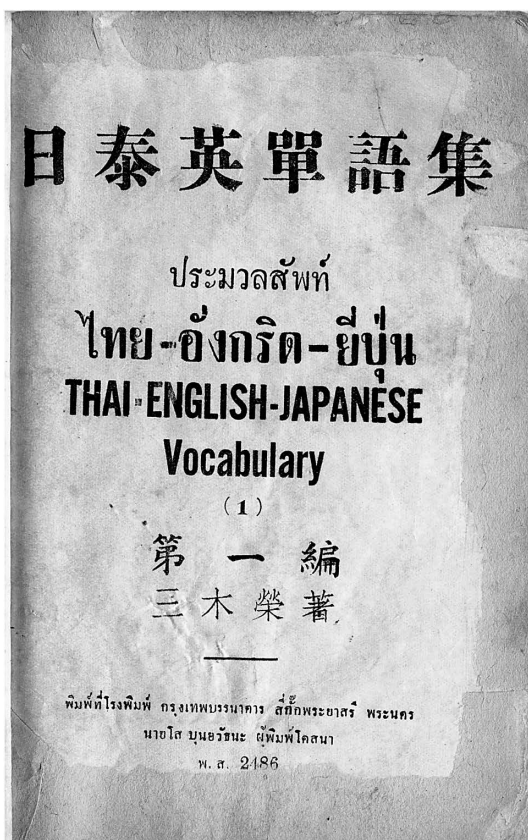
⑤三木榮『日泰英単語集 第一編(ประมวลศัพท์ไทย-อังกฤษ-ญี่ปุ่น, Thai-English-Japanese Vocabulary (1))』(クルンテープ・バナーカーン, 1943年, 48×2頁)(写真⑩)。本書は日泰両語ともに、「はしがき」はない。漢字交じりの通常日本語単語、泰語訳語の発音を片仮名表記、日本語単語の発音を片仮名表記、泰語訳をタイ文字表記、日本語単語の発音をタイ文字表記、英訳単語の順序で、6列を見開左右2面を用いて掲載している。本書を所蔵する図書館は皆無のようである。

三木榮は、1938年に日本人会が刊行した『日泰会話便覧』の日本語の「はしがき」(前述)で「引き続き別に大冊の会話編や単語集や日暹辞典などを続々刊行」することを予告している。

三木榮『山田長政之事蹟』(盤谷, 江畑洋行, 初版, 1942年8月25日刊行)の末尾に「自著泰国に関する出版図書目録(三木榮)」を付し、32冊の書名をタイトル、発行年月日、販売価額(非売を含む)、発行者、の順に記載している<sup>14</sup>。このうち、日本語タイ語学習書を、リストアップし図表にすると次のようになる。

番号	タイトル	刊行年月日	販売価額	発行者
17	日暹会話便覧	昭和13年2月15日	0.75 パーツ	日本人会
23	日泰会話第一編	15年5月	1.00 パーツ	日泰文化研究所

<sup>14</sup> 本書第3版(1943年1月20日発行, 写真⑩参照)末尾に掲載された「自著泰国に関する出版図書目録(三木榮)」も、1942年8月25日発行の初版と全く同一である。



写真⑰

24	日泰会話第二編	15年9月1日	0.50 パーツ	日泰文化研究所
25	日泰会話	15年11月	1.00 パーツ	自費出版
26	日泰会話便覧	15年11月25日	1.00 パーツ	自費出版
29	日泰会話便覧	17年1月	1.50 パーツ	ブラチャン印刷
31	日泰英語会話便覧	17年4月3日	1.50 パーツ	バナカーン書店
予告	日泰単語集	近日発刊		

上記リスト中の書名と、筆者が本稿で紹介した5冊との対応は、リスト番号17番は、筆者が本稿で紹介した①、同23番は②、同26番は③、同29番は④、同31番は⑤である。筆者が所蔵しておらず紹介できなかったのは、24番と25番である。

三木は、大冊とは言えないが、1938年に予告したものは概ね刊行したと言えるであろう。

#### IV 暹羅国日本人会経営盤谷日本尋常小学校の教師によるタイ人向け日本語教授（1934-1938）

##### 4.1 矢田部保吉公使による日暹交流促進の基礎インフラ作り（1934年）

タイでは1932年6月24日に、人民党による立憲革命が勃発した。新勢力の人民党は、英仏と親密な従来の王族政治とは異なり、日本に関心を向けた。とりわけ、1933年6月20日の第二次クーデ

ター以後、1934年にかけては人民党政権の親日的対日関心が目立った。新政権の親日傾向を促進する上で、矢田部保吉（1882-1958）駐シヤム公使の役割は大きなものがあった<sup>15</sup>。

矢田部は、日本からのシヤム国鉄への鉄道部品輸出の働きかけで面識があり親日家であったプレイヤー・サリットディカーンバンチョンを長とする、10名からなる訪日団を、第二回汎太平洋仏教青年大会開催の機会に、日本の産業を視察する目的も兼ねて派遣することを斡旋した。

10名とは、シヤム仏教青年会（1933年2月23日に28人のシヤム人男女により創立<sup>16</sup>）会長プレイヤー・サリットディカーンバンチョン、今回の来日後そのままシヤムの初代駐日商務官に就任するブラ・プラモンパンヤー（1896-1970、1935年6月まで駐日商務官）、ルアン・サンターンウィタヤシット（教育局官吏、1887-1937）、ルアン・チャウエーンサックソククラム（内務大臣秘書官、1900-1962）、クン・シーサラーコーン（特高警察課、1901-1987）、ウィラート・オーサターノン（文部大臣秘書官、1900-1997）、モームルアン・チットチュア・カムプー（農業局官吏、1907-1977）、シム・ウィーラワイタヤ（教育局官吏、1901-1943）、サグアン・トゥラーラック（監獄課官吏、1902-1995）及び日本に留学するプラヤット・セーンチュートーであった。

10名中の5名は1932年の立憲革命に参加した人民党員であった。

訪日団は、1934年6月8日にバンコクを発ち、20日に日本着、各地で産業視察や経済人との面談をなして、7月17日から7月末まで仏教青年大会関連行事に参加した。その後再び産業視察の後、プレイヤー・サリットディカーンバンチョンら2名は8月9日に横浜港を発ち、20日にバンコクに帰着した（『プレイヤー・サリットディカーンバンチョン葬礼記念本』タイ語、1967年）。

この視察団メンバーが中心となって、バンコクで1935年11月4日に日暹協会（のち日タイ協会と改称）を創立した。

訪日視察団は日暹親善の気運を高めた。矢田部は、タイ人の訪日視察・日本留学等を一層促進するために、様々な制度の立案・実施に努めた。例えば、タイ人留学生受け入れのための施設（国際学友会）、タイ人留学生への奨学金制度、訪日タイ人への日本語事前研修制度などである。

先ず国際学友会創立に関して見ると、矢田部公使は、1934年9月24日付け、廣田弘毅外相宛て公信第153号「留日暹羅学生の為にする保護指導機関設置の急務に関する件」で、次のような意見具申を行った。

昨年以來暹羅人子弟の日本留学希望者続出の模様にして、現に昨年春以來留学の目的を以て本邦に渡航する暹羅人学生に対し当館に於て旅行券査証を与へたるもの二十五名に上り居り 最近の傾向を察するに日本留学希望者は今後益々増加せんとするもの如くなり。然るに彼等日本留学希望者は未だ先輩留学生も少く、父兄近親の日本の事情を熟知せるもの無く、勿論日本に格別の寄辺もなく、従て渡日後の宿所希望学校の選定入学の手續等皆目不案内なるが為に渡日決行を躊躇せしめられ居る有様なり

<sup>15</sup> 村嶋英治『ビブーン：独立タイ王国の立憲革命』岩波書店、1996年、198-202頁

<sup>16</sup> シヤム仏教青年会の事務所は、王宮前のサーラーナロム庭園内に置かれ、1933年末の会員数は451人である。同会は、パリ語とともに日本語の学習も奨励した（Kenneth Elmer Wells, *Thai Buddhism: its rites and activities*, Bangkok Times Press, 1939, pp. 216-217.）

と、タイからの留学希望者増大の状況を説明したのち、

最近の情勢に適応する為には本邦に於て至急適當なる保護指導機関を設け、暹羅人学生をして該機関をたよりにて渡日せしめ、其の宿所、希望学校の選択、入学手続、日本語の予習等に付該機関の斡旋に待たしむることとするは是非共必要なり。渡日学生の数未だ多からざる此際特別の機関を作るに困難なるが如くにも見ゆれども実は今日留学熱の將に大に起らむとする此際こそ最も其の必要を痛感する次第に有之。…其の規模と機能に至りては費用との関係もあり、当方に於て立案すること差当り困難なるが、要するに当方としては最近漸次続出の傾向ある渡日暹羅青年学生のために適當なる差向け先を設けることに付至急本省当局の具体的考慮を仰ぎ度く存する次第なり（外務省記録 I.1.2.0./3-1「在本邦各国留学生関係雑件、泰国の部」、アジア歴史資料センター B04011347600, 46-49 頁）。

守島伍郎（1891-1970）東亜局第一課長は、この公信を、1934年10月19日付けで、大臣、次官、東亜局長、文化事業部長に「本邦に留学する暹羅学生は急速に増加しつつあり。之が指導監督機関設置の急務なることは論ずる迄もなき所なり。東亜局に於ても文化事業部等と連絡し種々画策しつつある処何分金銭の問題を伴ふ故 おいそれとは運ばざる現状なるが、然し何とかせねばならぬ義と存ず」という意見を付して提出した。1934年11月28日には、東亜局長、文化事業部長、会計課長等が出席し、対暹文化事業打合会が行われ、留日暹羅国学生指導監督機関設置の件も協議された。これらの動きは、結局、1935年12月18日に外務省直轄（文化事業部所管）の外郭団体として、国際学友会の設立として結実した<sup>17</sup>。

次に、矢田部はタイ人向け奨学金事業に関して、1934年11月19日付け「留日暹羅人学生奨学資金設定計画に関する件」と題した、廣田弘毅外相宛て公信第212号で次のように報告している。

先般印度聖跡等歴遊の途次当地に立寄りたる名古屋市伊藤治〔次〕郎左衛門氏本使来訪の際当国の内外情勢竝に日暹両国関係等に付種々談話を重ねたる未将来両国間緊密不離の関係を樹立する為には我国精神及物質文化の宣伝に依りて上下暹羅國民の対日依存觀念を一層涵養すること最も必要にして殊に青年の本邦留学を勧奨するを以て其の最も根本的なる急務とする所以を説き而して之れが為には篤志家の出資を仰ぎて奨学資金を設定して毎年継続的に優秀学生を本邦に送ること極めて望ましき旨の卑見を述べ考慮を求めたる処同氏は大に右〔上〕卑見に共鳴して右は頗る国家的意義深きことにして一年一萬円程度の出資を以て足るものならば何等困難なきことと思惟するを以て自分今回暹羅訪問の機会を得たる紀念として「やらせて戴くべし」とて速早実行方快諾を得たり。而して同氏は当方に於て本件具体的計画を樹て之を名古屋商工会議所会頭岡谷惣助氏宛送付方希望せられたるに依り本使に於て不取敢別紙の通試案を作成したる処元来本件の如き

<sup>17</sup> 村嶋英治「矢田部公使のタイ研究及び留学生事業—今日への遺産」矢田部会『特命全權公使 矢田部保吉』個人書店、2002年12月、121-122頁。なお、本稿は早稲田大学リポジトリより自由にダウンロードできる。矢田部と国際学友会に関しては、河路由佳「国際学友会の成立と在日タイ留学生：1932-1945の日タイ関係とその日本における留学生教育への反映」『一橋論叢』129巻3号、2003年3月）も参考になる。



は本使限りに於て之を運ぶこと決して適切にあらざるのみならず別紙試案を完成するには文部当局又は各学校当局と打合を要する点も少からず其他にも考慮を要する点多々なりと思考せらるるに付委細別紙に就き御査閲の上前記岡谷氏又は本年未迄には帰朝の筈なる伊藤氏と連絡して本件至急具体化するやう御配慮相煩度尚ほ本件は明年三月当国諸学校学年末に於て第一回の選抜を行ひ得るやう相運び度希望なるに付御含の上進抄方御手配有之様致度し（国立公文書館，文部省59,3A/32-6/2458，『外国人留学生，昭和九年十一月～昭和二十二年四月，第1冊』もしくは，前掲外交史料館 I.1.2.0./3-1，アジア歴史資料センターB04011347600, 67-68 頁）。

伊藤次郎左衛門という名は，名古屋の松坂屋主が歴代襲名したもので，当時の当主伊藤祐民（1878-1940）は，アジアとの交流に熱心で，矢田部公使の勧めに応じ，タイからの留学生受け入れに私財の一部を投じることを快諾したのである。矢田部公使は直ちに留学生受け入れの詳細な試案を作成し，外務本省に提出した。本省と伊藤との間の交渉ののち，1935年3月30日に伊藤次郎左衛門（祐民）は，外務省を訪問し，矢田部試案に修正を加えた案を示した。それによれば，大学入学者及び大卒者を受け入れること，日本での受け入れ大学・専門学校は名古屋市に立地しているものに限ること，および，タイ人留学生に奨学金を支給して日本に留学させる事業を主目的とした名古屋日暹協会を設立する，というものであった（前掲村嶋英治「矢田部公使のタイ研究及び留学生事業—今日への遺産」123-125頁）。なお，伊藤次郎左衛門の奨学金事業については，佐藤照雄氏の詳細な研究がある<sup>18</sup>。

さて，日本人小学校のタイ人向け日本語教授事業であるが，下記の矢田部公使の第151号電に見るように，日本の第二回汎太平洋仏教青年大会に参加し，1934年8月後半に帰国した訪日団の中から，日本語学習の希望が出たために，公使館の斡旋で同年10月上旬から日本人小学校の2名の日本人訓導（訓導とは師範学校卒で教員免状を有する者のこと，現在は教諭と称す）に担当させたことに始まることが判る。

矢田部公使発，廣田外務大臣宛第151号電（1934年10月30日日本省着）

暹羅に対し日本語学校の為当地日本人小学校教員を一名増員し所用経費は日本人会に対する補助金の形式を以て外務省の支弁を得度き件に付ては曩に本使在京中関係係局課長と一応協議の次第もありたる処近來当地に於ける日本語熱は非常に盛んとなり大学予備校<sup>19</sup>に日本語科新設の議も台頭し居り在留邦人より個人教授を受けつつある者も鮮からず仏教青年会に於ては先般渡日したる会長ピヤ，スリシチカン〔プレイヤー・サリットディカーンバンチョンのこと〕を始めとして二十余名の希望者ありて至急日本語クラス開始方熱心に希望し在留邦人中より適当なる教師物色方頼りに依頼越せるに付差向き日本人小学校現職員をして仮りに之を担当せしめ既に本月〔10月〕月上旬より開始したり然るに右は暹羅側熱望の機会に投ずる機宜の処置にして到底久しきに亘る事

<sup>18</sup> 佐藤照雄『戦前期日本の対タイ文化事業：発想の起点と文化事業の特性との関連性』柘植書房新社，2017年11月，143-203頁

<sup>19</sup> 当時中学6年を卒業して大学予科に進学した。ポビットピムック学校7,8年生の課程は大学予科に相当し，英語に加え第二外国語として，仏暦2477（1934/5）年度から日，中，独，仏の4ヶ国語を教授したので，ここに言う大学予科とはポビットピムック学校7,8年課程の可能性が高い。

を得ざるは勿論なるに付前記協議の件此の際直に実行方至急御詮議を仰ぐ万一本年度予算を以て差当り相付兼ねる場合に於ても何とか臨機適当の御工夫有之様特に御願致度御承認の回電を俟ち日本人会長特別補助申請の手続を執らしむべし（外務省記録 I.1.3.0./11-3「本邦国語関係雑件、日本語学校関係」アジア歴史資料センターB04011412900, 2 頁, もしくは、外務省記録 I.1.5.0./2-7-10「在外日本人各学校関係雑件 在亜南の部, 盤谷日本国民学校」アジア歴史資料センターB04012142800, 2 頁）。

矢田部の上記第 151 電に対し、廣田外務大臣は、次のように答えた。

貴電第 151 号に関し

新年度には何とか差繰り付くべき見込みなるが差当り本年度四ヶ月分として四百パーツを国際文化振興会其他より支出せしむることとせるに付民会〔日本人会のこと〕長をして申請の手続を執らしめられ度<sup>20</sup>

矢田部は、下賜休暇で在京中に、守島伍郎東亜局第一課長等に説明しておいたものであろう。守島が積極的に動いた結果、1934 年 11 月には、外務大臣から矢田部公使に外務省で予算化するという上記の方針が伝達された。

予算化の約束を得た矢田部は、日本人小学校を経営する日本人会幹部に申請書を提出させようと協議を開始した。日本人小学校の教師を使ってタイ人向けに日本語教授をする案は、矢田部が暫定的な便法として考案したものであり、日本人会の方には、このような企画に特に熱意があったとは思われない。加えて、21 頁のように、矢田部と日本人会長小川蔵太をはじめ日本人会幹部との関係は良好ではなく、矢田部は、日本人会の同意を得るために日本人小学校の日本人訓導が一人増加して 3 人になれば、従来の 2 学級編制を 3 学級編制に改善できることを強調したようである。それは小川蔵太日本人会会長が 1934 年 12 月 12 日付けで宮崎申郎領事に出した「盤谷日本小学校に対する補助金下付申請」（下記）が、学級編制改善の必要を強調し、日本語講習は二の次になっていることから推測できる。

領公第 7 号 昭和 10 年 1 月 12 日 在盤谷領事 宮崎申郎

外務大臣 広田弘毅殿

在外小学校費補助金増額方稟請の件

本件に関し客年 11 月末在暹矢田部公使宛貴電御来示の旨を承け当地日本人会長小川蔵太より提出に係る盤谷日本小学校に対する補助金下付申請書正副二通茲に転達申進す

今回当地日本人小学校に於て新に本科正教員一名呼寄の緊急なる所以に付ては客年往電第 151 号を以て矢田部公使より申進相成たる次第にて夙に御承悉の処茲許日本人会長より提出に係る別紙申請書は昭和 9 年度分に対する補助金臨時増額竝に昭和 10 年度に対する補助金増額方の両申

<sup>20</sup> 前掲外務省記録 I.1.5.0./2-7-10, アジア歴史資料センターB04012142800, 3 頁。この電報には、発信日時、電話番号の記載がないが、前後関係から外務大臣から矢田部公使宛 122 号電で 1934 年 11 月に発電されたものと思われる。

請を合併記載せる処本来ならば右両者は夫々別個に申請すべきものなるも今回申請は其の性質多少異例に属し為に申請理由稟請の便宜上右〔上〕兩個の申請を合記したるものなるに付右御含の上可然御取計相煩度

### 盤谷日本小学校に対する補助金下付申請

本会経営に係る盤谷日本小学校は大正十五年創立以来年を閲すること九年にして此の間卒業生を出すこと十五人に及び居れる処会財政の不如意の為其の内容の未だ甚だしく充実を欠けるものあるは本会の深く遺憾とするところに有之候、昭和五年度に於て漸く創立当初以来の単学級組織を二学級編制に改め稍教育上の効果改善に寄与する所ありしを認めらるるも六学年二学級編制の現状が尚頗る不満足のものなるは言ふ迄もなき所にして児童教育上幾多の不利不便を経験すること依然たるもの有之唯本会財政の実情は容易に右以上の改善実施を許さずして已むを得ず今日に及び居れる次第に候、然るに児童の数は逐年増加するのみならず当地に於て尋常科の課程を終りたる上日本内地に於ける中等学校進学を希望するもの近来漸次増加の傾向あるを以て本会小学校に於ては一層教科の内容を充実し児童学業成績の完全を期する必要痛感せらるるに至れるに拘らず一般基礎教育に於てすら充分なる実績を挙ぐることに困難なる現在の二学級編制を以てしては上級学校入学考査の競争に必要な準備教育実施の如きは到底之を望み得べくものなきこと勿論にして斯くの如き状態は単に児童父兄の希望に副ふ所以にあらずと云ふべきのみならず児童自身の不幸多大なるものあり殊に毎年多額の外務省御補助の下に本会小学校を經營しつつある目的も未だ其の一般を達成し得るに至らざるものと云ふの外無之候、就ては学級の完全なる正則編制は今日急遽実現を期待すること不可能なりとするも事情の許す範囲に於て最少限度の改善を行ふことは最早一日も忽諸に付すべからざる次第に有之候

更に近来日暹両国の国交益々親善の度を加へ暹羅人青年の対日関心日に顕著となり学生の日本留学を希望するもの亦漸く多からんとしつつあり従て日本語学習の志望各方面に起るに至り居候、本会に於ては此の情勢に順応して暹羅人間に日本語の普及を図るを以て日暹両国間親善関係促進に貢献する所多大なるものあるべきを信ずるが故に本会小学校の現在職員をして強ひて難きを忍びて時間を割かしめ去る九月以来公使館当局の指示の下に暹羅人の為に日本語クラスを設けて出張教授を実施し来り候、然るに暹羅人間に於ける日本語学習熱は日を逐ふて熾となり聞く処に拠れば官立学校に於て日本語を其の教科目中に加ふるの議すら台頭しつつある趣にして其の実現は尚ほ将来のことに属すべしと雖も本会の右日本語普及事業は現状の如き姑息策に依りて一時を糊塗するを以て満足することなく出来得る限り積極的措置を講じて以て前記の機運を促進するに努むること極めて必要且つ有意義にして其の両国の親善提携に資する所多大なるものあるを相信じ申候、而して之が為には本会小学校職員を充実して此の事業に当らしむること此の際の措置として最も捷徑にして且つ経済的なりと存ぜられ候

之を要するに一方に於ては本会小学校に於ける児童教育の効果を出来得る限り完全ならしむると同時に他方に於ては暹羅人間に日本語普及の成績を挙げんが為に日本小学校に有資格教員を一名増員することは差当り最少限度の施設として最早一日も之を緩ふること能はざるものに有之、仍て本会に於ては右目的を以て明年二月より有資格教員一名増聘の議実施方決定致し候処会財政

の現状到底所要経費を支弁するの余裕無之に付現時国費多端の折柄ながら前記実情篤と御諒察の上別記計算書の示す所に従ひ昭和九年度に於て運賃四百銖、昭和十年度に於て曩に本年七月廿日付一〇八号を以て申請したるものの外更に邦貨二千八百八十円の補助金追加下付方特別御詮議相成様然るべく御配慮相煩度此段稟請申進候 敬具

昭和九年十二月十二日

在暹羅国日本人会 会長小川蔵太

領事 宮崎申郎殿

## 別記

### 一、昭和九年度分

給与 運賃 240 銖（本俸八級俸（85 円）とし其の運賃換算額に在勤手当を合算し月額給与運賃 120 銖とす、2ヶ月分計上

旅費 同 315 銖（邦貨 500 円渡切 但し独身者の場合は運賃 200 銖即ち邦貨 320 円とす）

入国税 同 210 銖 2 人分（但し独身者の場合は 105 銖とす）

住宅費 同 100 銖

合計 運賃 865 銖也（内 465 銖也 日本人会支弁）

差引 同 400 銖也

### 二、昭和 10 年度

給与 運賃 1440 銖 前年通り

年末手当 同 120 銖

住宅費 同 600 銖

合計 運賃 2160 銖

内 同 360 銖 年末手当及住宅費の一部 日本人会支弁

差引 同 1800 銖

此の換算邦貨 2880 円也 補助申請額

（時価邦貨 160 円を以て運賃 100 銖と計算）（前掲外務省記録 I.1.5.0./2-7-10, アジア歴史資料センター B04012142800, 7-13 頁）。

矢田部は 1934 年 12 月 27 日発、廣田外務大臣宛公電第 188 号で、以下のように日本人小学校に採用する訓導の要件を示して、外務省に訓導の採用を依頼した。外国人に対する日本語教育の知識や経験を、要件として挙げてはならず、普通の教員採用の要件に近かった。

第 188 号

貴電第 122 号に関し

日本人会長の補助金申請書郵送す本年度所要額 865 チカル [パーツ] の中補助金 400 チカル以外は日本人会をして支弁せしむ昨年 [明年と訂正あり] 度所用経費 2160 チカルの中年末手当及

び住宅費の一部 360 チカルは日本人会支弁差引 1800 チカル此の邦貨換算額 2880 円を補助所要額とす右計算の詳細は補助願に添付郵送す

府県立師範学校出身の本科正教員、品行方正、身体強健、発音正確、酒癖なき者至急物色成るべく二月上旬着任する様御配慮を請ふ多少にても英語の素養ある者望まし俸給 8 級俸但し在勤手当を合せて暹貨 120 チカル支給（時価換算邦貨約 190 円）赴任旅費は 320 円渡切（家族携帯の場合は 500 円）入国税一人 105 チカルは日本人会負担住宅を給す帰国旅費は日本人会負担とす尚前記昨年〔明年と訂正あり〕度補助金額は本件計画遂行上是非共必要の額なるに付捻出方特別の御配慮を請ふ万一右削減せらるるが如きことあらば教員募集条件の変更を要するに至るべし為念尚赴任旅費は本年度補助金 400 チカルの中より貴方に於て御払ひ渡しを請ふ（前掲外務省記録 I.1.5.0./2-7-10、アジア歴史資料センターB04012142800, 4 頁）。

これを受けて、1935 年 1 月 11 日付亜二〔東亜局第二課〕普通合第 93 号にて、外務省は重光葵外務次官名で各府県に、在外指定盤谷日本人小学校訓導に応募希望者がいないかどうかを問い合わせた。

在勤手当を合わせると月額 190 円（日本の月給の 2～3 倍）の給与、往復旅費支給及び宿舍提供という好条件であったので、多数の応募があった。その中から東京市大森第四尋常小学校訓導で月額 75 円の後藤善吾（ぜんご、1907 年生）が選ばれた。後藤は、東京府青山師範学校〔東京学芸大学の前身の一つ〕第一部卒で小学校教員免許状を有し、更に法政大学専門部英語科専修科卒で師範学校中学校高等女学校の英語教員の資格も有していた。

後藤は妻を同伴して、1935 年 4 月 8 日に 3 年契約で着任した。平良仲次郎（校長兼任、平良は 1936 年 6 月に退職し代わりに渡邊文人が来任した）、金井純雄の二人の訓導に後藤訓導が加わって、日本人小学校に 3 学級編制が実現した。予算上では日本語教授要員である後藤も、他の二名の訓導と同様に学級を担当した。

後藤の着任は 1935 年度になったため、事前に用意された 1934 年度 2 ヶ月分の経費は不要となったが、本省は予定通り支給した。

外務省文化事業部は、1935 年度（昭和 10 年度）は日本語教授要員の経費として日本人会の申請額通り 1800 銖（パーツ）を助成した。

文化事業部第三課『第六十八回帝国議会参考資料（国際文化事業）』昭和 10 年 12 月（外務省外交史料館、議 BK-12 99 頁、或はアジア歴史資料センターB13081273800, 18 頁）は、第三課の国際文化事業に対する助成の一つとして「暹羅日本人会所属小学校講師備聘」を挙げ、その概要を「暹羅国盤谷日本人会に於ては同国に於ける日本文化研究熱日に昂進せる現状に鑑み其の経営する日本語学校〔日本人小学校のこど〕内に特に暹羅国人のために設備を為し日本語教師一名を増員し暹羅国人に日本語の教授を為すこととしたる処其の経費金壹千八百銖（邦貨換算金貳千九百七円也）不足を見るに付き補助申請あり仍て助成費として同額支給することとせり」と説明している。昭和 10 年 11 月に、被助成者の代表者たる、暹羅盤谷日本人会会長小川蔵太に 2,907 円（1,800 パーツ）が助成された。

1935 年度にどのような日本語講習を実施したかは、1936 年 5 月 25 日付で暹羅国日本人会会長鈴木宇治が在盤谷総領事森喬に提出した下記「暹羅人に日本語教授事業報告」から窺うことができる。

それによると、

### 暹羅人に日本語教授事業報告<sup>21</sup>

昭和十年度本会に於て暹羅人に日本語教授を為せる事業実績竝に外務省より補助を仰ぎたる助成金取支計算別紙の通及報告候也

#### 暹羅国人に日本語教授の事業実績

一、本事業開始の経緯

最近日暹間の親善関係の増進に伴ひ暹羅人中日本留学乃至視察旅行に赴かんとする者多きを加へ之等暹羅人は渡日前在留邦人有志等に就き個々に日本語を学習する者ある一方暹羅人一般も日本語修得の希望者少からざる趨勢となれり茲に於て之等希望者の要求を充し旁々一層之が氣風の助長を計る為め当日本人会の事業として日本人小学校内に日本語講座を設け日本人小学校訓導を以て之が教授を担当せしむることとせり

然るに之等暹羅人の多くは現に大、中、小学校等に通学中の学生、諸官庁に奉職中の文武官其他商業に従事せる者等にして各人の学歴等甚だしく区々たるものある外各の立場の異なるにつれ学習目的を異にし居る為め之が教授に少からざる手数を要する処当時日本人小学校に於ては教員二人が各々三学級を受持ち居る状況にして右二教員のみを以て之に当らしむることは酷暑の当地としては過重の嫌もあり旁々此際学校訓導一名を増員し小学校自体の教授を改善すると共に同訓導をして前記暹羅人に対する日本語教授に主として当らしめ他の二教員をして之が補助を為さしむることとし監督官庁よりも右増員方御承認を得ると共に他方訓導一名増員に要する費用は当日本人会としては到底之を支弁し得ざる実情なりしに付外務省の御補助を仰ぎたる次第なり

尚事情前記の通に付本事業第三項記載の教員は外務省より御補助を受け居る後藤訓導の外他の二教員も補助的に之が教育に当り居り後藤訓導分のみを分離報告致し難きに付右〔上〕一括報告致し居り<sup>22</sup>

二、事業責任者 在暹羅日本人会長 鈴木宇治

三、事業方法

毎日午後四時より九時半の間に於て一時間半乃至二時間行ふ、但し日曜、日本の祝祭日、暹羅国祭日等の休日は之を除く

一般希望者及官吏、学生等を必要に応じ其の学力の程度により區別して之が教授をなす、而して学習希望者は各自の職業の繁簡、学生自身の学期試験等の関係上自然絶へず人員増減し一定せざるも最大限三十人前後なり

右〔上〕日本語教授中特に纏りたる聴講者は左〔下〕の通

1、昭和10年6月より9月迄 日本視察旅行に赴く警察官吏に対し特別クラスを設け教授す、人員11人

2、昭和10年9月より11月末迄 日本留学の海軍将校23名及陸軍将校13名に対し特別クラス

<sup>21</sup> 本報告は、1936年5月30日付在盤谷森総領事来信機密領第77号の付属資料として外務本省に提出された。

<sup>22</sup> 1935年度の3名の日本人小学校訓導の学級担任は、後藤（2年生、5年生）、平良（3年生、4年生）、金井（1年生、6年生）であり、3名とも均しく2学年を担当した（「在外指定盤谷日本尋常小学校（後に盤谷日本国民学校と改称）卒業生一覧表」）。

を設け教授す

3, 昭和10年7月より8月末迄 日本の医学校入学希望者及名古屋奨学資金に依る日本留学の希望者の為め特別速成科を設け教授す

其他左〔下〕の通出張教授をなしたり

昭和10年12月1日より11年2月末迄 渡日の海軍将校, 下士, 兵員等百余名に対し特に毎日午後三時より五時迄暹羅国海軍兵学校に出張教授す

#### 四、外務省よりの補助金収支計算書（昭和十年度）

##### 一、収入の部

一、外務省補助金	1800 銖
二、入学学生月謝	130 銖
三、日本人会支弁	535 銖
合計	2465 銖

##### 二、支出の部

一、施設費（教室設備機及椅子等の設備を含む）	800 銖
二、給与（昭和10年9月より昭和11年3月に至る）	840 銖
三、年末手当	120 銖
四、住宅費（昭和10年9月より昭和11年3月に至る家賃の外寝台等の購入費を含む）	550 銖
五、雑費（出張教授の車馬賃をも含む）	155 銖
合計	2465 銖（前掲外務省記録 I.1.5.0./2-7-10, アジア歴史資料センターB04012142800, 27-29 頁）。

上記報告の収入の部に入学学生月謝として130銖<sup>23</sup>が計上されているので、1935年度においてもタイ人一般希望者に対する日本語教授を実施したことは、間違いないであろうが、実施方法の記述は具体性を欠き曖昧である。

1935年度事業は、一般希望者への教授よりも訪日予定の文武官吏・留学生に重点が置かれたようである。このうち、「日本視察旅行に赴く警察官吏」とは1936年来日したタイ警察官ジャムラット、プラチュアップ、バンチョンら<sup>24</sup>を指すのであろうか。「名古屋奨学資金」とは、本稿33頁に述べた名古屋松坂屋主伊藤次郎左衛門の奨学金のことである。また、「渡日の海軍将校, 下士, 兵員等百余名」への出張講習は、本稿11頁に述べた潜水艦訓練に1936年6月と1937年2月に来日した海軍軍人のためであろう。

本節のこれまでの記述の多くは、外務省記録 I.1.5.0./2-7-10 「在外日本人各学校関係雑件 在亜南

<sup>23</sup> 暹羅国日本人会の「昭和10年度教育費決算報告書」には1935年度に126パーツの授業料収入があったと記載されている（前掲外務省記録 I.1.5.0./2-7-10, アジア歴史資料センターB04012142800, 47 頁）

<sup>24</sup> 村嶋英治編集・解説『堀井龍司憲兵中佐手記, タイ国駐屯憲兵隊勤務（1942-45年）の想い出：付録18 方面軍参謀原寿雄少佐手記』早稲田大学アジア太平洋研究センター, 研究資料シリーズ no. 7, 2017年3月, 150-151 頁参照。なお, 本書は早稲田大学リポジトリより自由にダウンロードできる。

の部、盤谷日本国民学校」ファイルに依っている。

このファイルの問題は、1936年度以降の日本人小学校の日本語教授事業について具体的な内容を欠いていることである。そこで、既存研究では利用されることがない暹羅国日本人会会報<sup>25</sup>などによって1936年度以降の日本語教授事業を見てみたい。

#### 4.2 暹羅（泰）国日本人会会報に見る日本語教授の実態（1936-1938）

日本人会会報の紹介の前に、1936年度から38年度における外務省文化事業部による日本語教授への助成額を見ておきたい。

『外務省文化事業部、昭和11年度執務報告』<sup>26</sup> 1936年12月1日、251頁によれば、文化事業部は、支那満州を除く国際文化事業（第三課担当）の一つとして、1936（昭和11）年度に「暹羅国盤谷日本人会小学校に於ける日本語教授に対する助成」を行った。助成金は2,853円（1,800パーツ）である。助成の理由は次の通りである。

最近日暹間の国交益々敦厚の度を加へ暹羅国人の対日関心の高まると共に日本語学習の志望者日に多きを加へ居る処目下暹羅国に於て日本語を教授し居るは同地日本人会経営に係る在留邦人の子弟教育を主なる目的とする小学校のみにして他に適當なる機関なく新なる施設を必要とするも現在の焦眉の急に應ずる為右小学校に教師を増員し暹羅人にも解放する事としたる処其成績良好なるに付之に對し前年度同様〔前年度即ち昭和10年度は、1935年11月に2907円（1800パーツ）を助成〕助成金を交付せり

即ち、1935、36年度の助成額は兩年とも1,800パーツであった。日本人会は、1937年度についても、前年通り1,800パーツの助成を申請した<sup>27</sup>。ところが、申請額の2倍以上に当たる7,900円の助成が行

<sup>25</sup> 1930-40年代の暹羅国（泰国）日本人会は、合計11号の会報を発行している。このうち1号から7号迄は、号数の前に「復活」が付され、且つ謄写版印刷である。復活と付しているのは、1920年代初期に会報を出したことがあり、それを復活したという意味である。復活第1号（1932年6月）、復活第2号（1932年11月）、復活第3号（1933年7月）、復活第4号（1933年12月）、復活第5号（1934年6月）、復活第6号（不明）、復活第7号（1936年7月）のうち、1号から5号までは台湾の国家図書館のみが所蔵し、6号を所蔵する図書館は見つからず、7号は公益財団法人日本タイ協会が所蔵している。欠号の6号を除き、1号から7号まで筆者は一冊に編輯して、2018年8月に泰国日本人会に寄贈した。日本人会の図書室に所蔵されている筈である。8号（1937年5月）からは号数から「復活」の字が外され、かつ日本での活版印刷に変わった。9号（1938年3月）、10号（1939年9月）、11号（1941年3月）が刊行された。なお、日本人会会報を所蔵する日本の図書館は、国立国会図書館のみであるが、同館が所蔵するものも10号のみに限られている。

<sup>26</sup> 外務省文化事業部『外務省執務報告、文化事業部、昭和11年～14年』1995年8月25日発行、クレス出版で復刻されている。

<sup>27</sup> 昭和11年7月24日付 在暹羅国日本人会会長鈴木宇治から外務省文化事業部長宛申請書は以下の通り。

##### 暹羅国日本尋常小学校に於て暹羅人に日本語を教授する為め備聘せる教師の補助金交付申請書

当日本人会に於ては昨十年度より外務省の御補助を仰ぎて本会経営の日本尋常小学校に訓導一名を増員して暹羅人に対し日本語教授の事業を開始せる次第及之が経過に付きては既に報告申進置きの通りに有之候処元來此の種事業は一、二年を以て中止すべき性質のものに非る上前記経過報告に記載の通り相当の成績を納め且つ将来益々発展の可能性をも予見せらるるにも鑑み引続昭和十二年度に於ても同事業を継続致し度き所存に有之候然るに日本人会自体の財政状態は屢次申進めの通り未だかかる事業を自力を以て経営するの余力を有せざるにつき右事情御諒察の上之が経費不足額金千八百銖也昭和十二年〔1937年〕度に於ても御補助相仰ぎ度事業収支予算書相添へ此段及稟請候也

昭和十一年七月二十七日

右



われた。即ち、「盤谷日本人小学校に於ける対暹人日本語教授機関助成」として「対暹文化事業の重要性に鑑み先づ日本語教授機関の整備を急務とし在盤谷日本人会小学校をして暹羅人に日本語を教授せしむることとし該事業に対し金7900円也を助成せり（昭和12年12月10日決済）」（『文化事業部執務報告、昭和13年度（自昭和12年12月至昭和13年11月）』1938年12月1日、145-146頁）。1937年度の大増額の方針は、後述（本稿43頁）の1937年4月30日の日本人会第二次総会における、公使館の笠原太郎書記官や田村浩武官の日本語教授積極推進の発言からも窺うことができる。その背景として考えられるのは、日本海軍の南進論、1935-36年頃からの日本大手企業のタイへの積極的な進出などである。加えて、1937年7月7日に日中戦争が勃発すると、在タイ華僑の過激な抗日運動やタイ内外の東アジア情勢の激変も、予算の大増の一因となったと思われる。これを受けて、後述するように日本人会の日本語教授事業は、暹羅日本商工会議所に教室を設けるなど、従来以上に整備された。

1938年度には、日本語教授事業は日本人会から日暹協会（1935年11月4日にバンコクで創立<sup>28</sup>）の経営に移され、助成金も更に増額した。即ち、「昭和12年度に於て盤谷日本人会小学校に於ける対暹羅人日本語教授機関に対し金7900円也を助成する所ありたる処尚其の整備に益々急を要するものあるを認めたるに付本年度に於ては右事業を在盤谷日暹協会の経営に移し一層事業の拡大を期することとし更に同協会に対し金2万1700円を助成せり（昭和13年6月9日決済）」（『文化事業部執務報告、昭和13年度（自昭和12年12月至昭和13年11月）』1938年12月1日、149頁）。なお、日本人会経営日本人小学校のタイ人向け日本語教授事業が日暹協会に移管決定後も、日本人会は後藤善吾訓導（3年任期満了後延長せず帰国）の後任予算を外務省に求めたが、予算はつかず、日本人小学校は3学級編制から渡邊文人校長と金井純雄訓導による2学級編制に逆戻りした<sup>29</sup>。

序でながら、1939年度については、「盤谷日本語学校に助成、日暹協会経営に係る在盤谷日本語教授機関たる盤谷日本語学校に対し維持費及新規事業費として金1万9600円也を助成せり（昭和14年6月13日決裁）」（外務省文化事業部第二課『昭和14年度執務報告』1939年12月1日、14頁）。

## 暹羅国日本人会会長 鈴木宇治

## 収支予算書（自昭和12年4月至昭和13年3月末）

支出の部	
一、備品補給費	100
一、給与（満二年を経過せるにつき若干増俸の見込）	1560
一、年末手当（同）	130
一、住宅費	600
一、雑費（特別教授の車馬賃及電灯料等を含む）	200
計、	2590
収入の部	
一、日本人会支弁	610
一、学生月謝	180
計	790
差引不足額	1800 銖

（前掲外務省記録 I.1.5.0./2-7-10、アジア歴史資料センターB04012142800、18-19頁）。

<sup>28</sup> バンコクの日暹（日タイ）協会の設立経緯に関しては、前掲村嶋英治編集・解説『天田六郎氏遺稿、「シャムの三十年」など』269頁を参照のこと。

<sup>29</sup> 前掲外務省記録 I.1.5.0./2-7-10、アジア歴史資料センターB04012141600

さて、1936年度に外務省文化事業部から1,800パーツの助成を得た日本人会経営日本人小学校の日本語教授事業を日本人会会報より見てみよう。

『暹羅国日本人会会報 第8号』（1937年5月1日刊）の「役員会議事」欄には、次のような日本語教授関係の記載がある。

まず、1936年7月29日の臨時役員会の項に、「一、日本語教授の件、九月一日より後藤訓導が、希望者に日本語を教授、可決。月謝二銖とし、第一期は六ヶ月間、時間は午後四時より五時半迄とす」（会報8号、88頁）。

1936年9月4日の役員会の項に、「一、日本語学校の経過、九月一日開校、在籍数六十四名、百二十八銖収入<sup>30</sup>ありたり、一日二時間、一時間は後藤〔善吾〕先生の会話、一時間は金井〔純雄〕先生の文字書方及読方、渡邊〔文人〕校長補助。後藤先生の教授状態の説明あり。会計、職員は当分無給、六ヶ月後に決定。消耗品、広告料は授業料中より支出。黒板二十五銖、机二個五十銖（日本人会の一般会計より支出）教員の勤務関係は六ヶ月試みて後更に研究の事」（会報8号、89頁）。

1937年2月10日の項に、「一、日本語学校、二月末日を以て満期となり、五月より再開希望する者あるも、それは次期役員にて協議すること。一、日本語教員にボーナスとして渡邊、後藤、金井三氏に若干金額を贈ること、但し残金の一部今後の日本語学校の経営に費することとす」（会報8号、93-94頁）。

1937年3月15日の項に、「一、四月の総会に役員側より提出すべき議案、役員提案…（ロ）日本語学校の件、正式開校に就ての賛成を求める」（会報8号、94頁）。

また、『暹羅国日本人会会報 第9号』（1938年3月1日発行）（写真⑱）の「役員会議事」欄に、1937年4月17日の日本人会定期総会において次の質疑応答があったことが記されている。

神林〔梯一〕氏質問 日本語学校は何時より開設したるか、  
会長〔鈴木宇治〕回答 一昨年〔1935年〕総会<sup>31</sup>の上にて決定す。  
神林氏 成績は良好なりと云ふも如何なるものなりや、  
会長 最初六十二名なりしも長続きせざる者若干あり其の学業は尋常小学二年修業の程度なり（会報9号、34-35頁）。

以上から1936年度の日本人小学校におけるタイ人向け日本語教授は、後藤訓導だけではなく金井、渡邊の2教員も加わり3名の全教員が担当して、1936年9月から1937年2月まで6ヶ月間実施されたことが判る<sup>32</sup>。9月開校時の当初受講者は64名であり、各2パーツの学費を徴集した。出席受講者数は次第に減少したが、明確な数字は記載されていない。因みに1937年度については出席者数の減少が明示されている（後述）が、1936年度も同様の傾向が見られたものと思われる。日本語教授事業を次年度も継続するか否かは、日本人会の役員任期は1年なので毎年日本人会年次総会での決定を

<sup>30</sup> 暹羅国日本人会の「昭和11年度教育費決算報告書」には1936年度に160パーツの授業料収入があったと記載されている（前掲外務省記録I.1.5.0./2-7-10、アジア歴史資料センターB04012142800、48頁）。

<sup>31</sup> 1935年の総会の様子は、日本人会会報復活6号を所蔵する図書館が皆無のため不明。

<sup>32</sup> 1936年度の日本人小学校の3訓導の担任学年は、後藤（3年生、6年生）、渡邊（1年生、5年生）、金井（2年生、4年生）であり、均しく2学年を担当している（「在外指定盤谷日本尋常小学校（後に盤谷日本国民学校と改称）卒業生一覧表」）。



写真⑱

要した。なお、1936年度の日本語授業が実施された場所については、記載がない。

次に、助成額が大幅に増額されることになった1937年度の日本語教授の様子を、引き続き『暹羅国日本人会会報 第9号』（1938年3月1日発行）より見てみよう。

1937年4月30日の日本人会第二次定期総会において次のやり取りがあった。

- 一、笠原〔太郎、公使館三等書記官〕、日本語教授の現状に就て参考に承はり度し、
- 一、新野〔芳四郎〕理事、昨年〔1936年〕九月から六ヶ月間の日本語講習を説明。
- 一、笠原氏、日本方面では当今此の事に就て非常に関心を持ち注意を喚起して居りますから成る可く徹底的に完全に学習させ度き希望であります。外務省当りでも之に就ては何とか後援出来ると思はれますが充分やつて頂き度です。
- 一、鈴木〔宇治〕氏、消耗品、備品の項に関する字句訂正注意あり、
- 一、田村氏〔田村浩武官〕、日本語学校の件、私共の考えて居りますのは日本人会のみならず日暹協会辺りでもやつて今少し盛んにやり度希望、
- 一、笠原氏、宣伝方法に就て有効にやつて頂き度
- 一、百瀬〔源一〕氏、田村武官の仰せらるる様に致しますと外務省補助の金一八〇〇・〇〇は消滅する事になりますから之も御考慮され度（会報9号、42頁）。

上記のように日本公使館の笠原書記官、田村浩武官の発言からも、公使館はタイ人向け日本語教育の、より本格的な推進を考えていることが判る。

1937年5月10日に、日本人会の教育に関する打合せ会が開かれ、出席者は江尻〔賢美〕委員、大谷〔長三〕委員、森〔喬〕総領事、笠原書記官、渡邊〔文人〕校長、福田警部、後藤訓導、新野理事、新田〔義實〕理事長であり、次の決定がなされた。

一、小学校と日本語教育との主従関係の研究

昭和九年十二月十二日小川〔藏太日本人会〕会長より領事（宮崎申郎）宛補助金申請の書類〔本稿35頁参照〕を主とすることに決定す。

二、日本語学校の実際案

A、二学級編成とす。

B、後藤訓導は小学校にて一年生を午前中三、四時間教へ午後及夜間日本語を教へること。

C、大谷委員は事務会計通知等の事務を担当し助手を置く。

D、時間割 六月一日より四ヶ月間、十一月一日より四ヶ月間午後及夜間とし詳細は大谷委員と後藤訓導打合決定のこと。

E、場所 〔暹羅日本〕商工会議所<sup>33</sup> 楼上（会報9号、44頁）。

1937年5月17日の理事会で

二、五月八日付を以て会長より大谷〔長三〕、江尻〔賢美〕両氏を教育委員に囑託したところ御同意を得たり。

三、日本語教授の件

六月始めより商工会議所の二階にて開催に決す。仏曆二四七九年私立学校令と如何なる関係あるや研究中（会報9号、44頁）。

しかし、暹羅日本商工会議所の2階を教室として1937年6月に開校する決定をしたにも拘わらず、6月には開校できなかった。その理由は、下記のようにシャムの新学校令に抵触する問題の解決が遅れたためであろう。

1937年7月4日の日本人会理事会において、「10、日本語教授の件暹羅国新学校令との関係上目下暹羅国文部省と交渉中」（会報9号、47頁）と報告され、

---

<sup>33</sup> 『新田義實日記』の1936年8月3日の項に、暹羅日本商工会議所発会式（会頭は三井物産盤谷支店長の平野郡司）とある。この商工会議所の英語名は Japanese Chamber of Commerce and Industry in Siam (Bangkok Times, 12 Oct. 1937)、タイ語名は Hokan kha lae Utsahakam jipun haeng sayam である。1937年12月の憲法祭当時の会員数は26（『日暹協会、1937年憲法記念祭出店記念号』タイ語）。日本自動車輸出組合『泰国蘭印視察報告書』1940年12月、中の「泰国ノ部」の58-60頁に「1940年現在のタイ日本商工会議所普通会員及其代表者名簿」が掲載されており、その名簿によれば、1940年の普通会員数は34商社。新田義實「最近の泰国事情」『日本タイ協会々報』第39号、1944年4月、20頁によれば、1943年8月の会員数は約150。商工会議所の前身は、暹羅実業協和会である。1936年9月1日の商工会議所役員会までにシャム政府への届け出を完了し商工会議所が確立したので、同年9月7日の商工会議所総会は実業協和会の解散総会となった（『新田義實日記』1936年9月7日の項）。

1937年7月26日の臨時理事会（1937年4月18日に日本人会会長に選出された三原新三が一時帰国したため、同じく同年4月に理事長に選出された新田義實が9月まで会長代理）では、「二、[日本人小学校] 名誉校長江尻英太郎<sup>34</sup>氏俄に帰朝に付植松[秀雄]氏就任を依頼すること。三、江尻氏には七月迄二十九銖支出したり。四、日本語学校は仏国のアリアンフランサーに準じて開始せんと思ふ。九月開催」（会報9号、48頁）と報告されている。

1937年9月1日<sup>35</sup>には暹羅日本商工会議所を教室として開校が実現したことは下記の記録から明

<sup>34</sup> 江尻英太郎は、江尻賢美・ハマ長男としてバンコクで1914年2月22日生、本籍は富山県婦負郡花村桐谷1975、バンコクの日本人小学校の最初の卒業生（1928年3月卒）である。江尻英太郎は、自著『タイ語文典』（ไวยากรณ์ภาษาไทย, 大八洲出版, 1944年11月25日発行, 全353頁）の著者略歴を次のように書いている。

タイ国盤谷市にて出生、昭和八年タイ国盤谷市語学上級中学（専門学校程度）アッサムシオン・カレッジ卒業。現在慶応義塾大学語学研究所研究員兼外国語学校タイ語講師、善隣外事専門学校タイ科教授、財団法人日泰文化会館嘱託、社団法人日本映画社タイ国向映画タイ語字幕翻訳並に説明録音担当。主なる著書：「大東亜語学叢刊・タイ語」（印刷中）朝日新聞社、「タイ国地名辞典」（印刷中）中文館、「タイ民族史」（執筆完了）、「日本語の音声」（タイ文にて執筆完了）、「日・タイ大辞典」（目下執筆中）。

慶応義塾編『慶応義塾百年史 中巻（後）』1964年10月20日発行、550-558頁、によれば、1942年10月に慶応義塾外国語学校（25ヶ国語を専門の講師が教える）が設置され、江尻英太郎は泰語講師（泰語講師は江尻一人のみ）として採用されている。1942年10月26日に入学式があり泰語科の入学者は18名であった。上記『タイ語文典』の「序」の全文は以下の通りである。

タイ語の必要性は日を逐うて益々倍増して来た。日泰両国は日泰攻守同盟に次いで日泰文化協定の成立を見るに至り、緊密な友好関係の磐石堅固な基礎は両国国民に於ける相互の理解にあるのである。これには両国国民の民情、国情の相互調査研究、及び相互の文化交流、国民の意志交換伝達等の諸問題が当然起きて来る。真の調査研究も、文化交流も、国民の意志交換伝達等も、その国民の言語を用ひず、第三国の言語を仲介しては、その万全を期するに難いのである。

斯様に重要なタイ語は、その必要性に比し、それを講習せんとする者極めて少きは全く遺憾とする所である。これはタイ語なるものが急速に重要舞台に登場したためと、従来余り重要視されず、その普及が活発でなかつたためと、又邦文及び欧文で書かれた完璧な参考書が全く無かつたためとに帰依するのである。本書は専らタイの文法を正確に解釈し、正確にその文章を作らんとする者の道案内として、特に文章に関する項目に重点を置いて書いたものである。大体タイ国専門学校程度の学校に於て用ひられている、**อักษรวิธี**（音韻法）**วชิวิภาค**（語法）**วากยสัมพันธ์**（文章法）の三冊を基準にして、筆者が初等教育より専門教育までの13年間のタイ専門学校 Assumption College に於て得たる体験を基礎にして、筆者が内地帰朝後得たる言語学的知識を土台に加へたる註釈的説明を合はせて書いたのである。この書によつてタイ語を研究され、以て日泰両国親善のために努力されんとする有志が一人でも多く増へるなれば、筆者の幸甚と感ずる所である。

尚本書の刊行に当り、タイ文字の活字を考案作製され、日泰両国文化交流のために挺身されてられる寺脇直宏氏、日泰両国親善並びに文化交流のため、タイ国向タイ文日本文化紹介出版物を刊行企画せられた保延茂氏（目下応召中）、並びに利益を超越して、その印刷能力をタイ文図書出版に傾注せられる交進社印刷所主余部博章氏の協力に深く感謝の意を表す。

昭和十九年九月十日

東京青山高樹町の寓居にて  
著者識

英太郎が上記著者略歴に「主なる著書」として挙げたものは、印刷中と記した2著を含め、どれも刊行には至らなかつたようで、今日手に取ることはできない。英太郎を知るタイ人大学教授（専門日本語）の話によれば、英太郎は晩年、バンコクで日本人駐在員の家庭でタイ語の家庭教師をしていたが、教え子の駐在員の家に朝から入り浸っていつまでも帰らず顰蹙を買っていたという。

タイ地域研究のための必要な条件を備え、且つ有能であった英太郎が、戦後タイ研究を深める場所を得られなかつたことは残念である。なお、英太郎の父江尻賢美については、本稿注42参照。

<sup>35</sup> 『新田義實日記』の1937年9月1日の項に「日本人会主催の日本語講習会の始業式を午後五時より商工会議所楼上にて行う

ไทยพาณิชย์ จำกัด

## 急 告

敝會爲酬謝顧客素愛之起見例年宜貨而廉賣  
凡二次如去年十一月之特賣其成績甚博各界  
之歡迎故本期特再實行四日間如左



○ 期 間

六月五日	星期五	上午	自九點
六月六日	星期六	至十二點	
六月七日	星期日	自一點	
六月八日	星期一	至五點止	

○ 場 所 在

本京四角丕耶詩四角頭電車埠  
本會之樓上樓下全部

品 名

日常食料品一切、海陸物產及罐頭類一切、疋頭絲綢毛棉織  
物類一切、電氣、五金類、磁陶器、玻璃器、汽車樹膠、  
橡皮類、漆類文具、化學玩具類、靴鞋、化妝品、醫療器  
具及雜貨等不能盡錄、

貨物均是对祖家新辦特撰價宜之上貨爲宣傳  
普遍於暹京之起見而漸廉賣即不論從有無交  
易均希蒞場參觀有所評判之爲幸

暹 羅 日 本 實 業 協 和 會 事 務 所 謹 告

\*十三・五・五廿 業作認人印督 印承局印石務印昌南

写真⑱

白である。なお、暹羅日本商工会議所の前身は暹羅実業協和会（Japanese Foreign Traders' Union, 1933年9月に12社で創立）<sup>36</sup>であるが、商工会議所は、暹羅実業協和会が1934年7月に借り入れた建物（Seekok Phyasri 所在）を引き継いだので、写真⑱の2階で後藤訓導による1937年度の日本語教授が実施されたのである<sup>37</sup>。

生徒は十五名」とあり、始業式の式典自体に参加した受講者は15名に過ぎなかったことが判る。新田日記1938年2月28日の項には「日本語研究科の終了式」と記されており、予定通り6ヶ月間の日本語授業が終了したことが判る。

<sup>36</sup> 訪暹経済使節団『訪暹経済使節報告書』1936年、368頁に「邦商輸出入業者の意思の疎通と貿易上の利益を擁護し其の統制を図る目的にて昭和八年九月より暹羅実業協和会を組織せり」とあり、日本公使館作成『暹羅国情摘要』（1934年2月7日起草、外務省記録A600 6-7）34頁にも同文がある。暹羅実業協和会は、1933年9月に盤谷の輸出入業の邦商12社（江畑洋行、日高洋行、豊昌洋行、日出薬房、伊藤洋行、伊藤忠洋行、三井物産盤谷出張所、溝上洋行、日華公司、南洋商行、大谷洋行、山口洋行）が結成した。「同会の事業は同会会則第十条に記載の通（1）日運商品の陳列及紹介、（2）日運商品売買の斡旋、（3）来暹渡日の商業団体及視察者の斡旋、（4）日運商品の代理店又は一手販売権獲得に関する斡旋、（5）日運貿易上の商事裁定検査及之に関する報告等にして換言せば公平なる日運貿易助長機関たるの職能を發揮せんとするものなり」（昭和9年10月27日付、在盤谷領事宮崎申郎の広田弘毅外相宛領公第154号公信、「暹羅実業協和会事業開始に関する件」、外務省記録E.2.6.0/5「在外経済並職業団体関係雑件」、アジア歴史資料センターB08061581800, 2-5頁）。

<sup>37</sup> 神戸の岡崎忠雄氏招致泰国学生日本見学団は1938年から1941年まで毎年春に訪日したが、1938年4月実施の第一回見学団10名について、第二回参加のウドムは次のように書いている。

神戸第一の資産家岡崎忠雄氏は吾々タイ青年に日本文化とその国内事情を紹介する目的で、私財の一部を投ぜられ昨二四八一年〔仏曆〕の始め〔1938年4月〕に日本語科学生を日本視察旅行に招待された。この一行はシーカック・パヤーシーにあつた前の日本語科学生徒五名とベンチャマ・ボビット〔ボビットビムックの誤記〕学校日本語科生徒五名で案内人として三木〔栄〕先生が共に行かれた。降つて本二四八二年第二回旅行団が前と同様に招待されることになつた。今回は団長〔日本公使館勤務のブンチュア〕と共に十二名で盤谷日本語科学生徒から試験で選ばれた生徒〔5名〕と文部省が各学校から選んだ生徒〔ワチラーウット、スワンクラブ、テーパシリン、パーンソムデットから各1名、ボビットビムック日本語科から2名〕から成つていた（『日本タイ協会会報』第18号、1940年2月、67-68頁）。

これから1937年9月から6ヶ月間、日本人会経営日本人小学校タイ人向け日本語教授事業として後藤善吾訓導が教えた商工会議所は、シーカックパヤーシー（Seekok Phyasri）に位置し、この1937年クラスの生徒5名が第一回岡崎忠雄日本見

1937年10月12日の理事会で「ホ、教育部報告」として次のような詳細が報告された（会報9号、53頁）。

- A, 日本語研究科授業料収入並に備品購入の件
- B, 後藤訓導に対し日本語講習特別手当（商工会議所に教室を置くことに依る）支出の件決定月二十銖（渡切）
- C, 商工会議所書記に対する謝礼は終業の際為す
- D, 日本語研究科生徒職業別並九月出席表  
 主なるもの 学生 23, 教師 9, 陸軍軍人 4, 大学生 4, 宮内省 4, 農務省 4, 電気局 4, 警視庁 4, 店員 4, 郵政局 5, 区役所 3, 海軍軍人 3, 新聞社 3, 其他 22 計 96 人

教育部報告の1937年9月出席表を図表で示すと次のようになる。

	A組	B組
授業日数	12日	13日
在籍生徒数	45名	51名
全月皆出席数	10名	7名
出席定数	540 [45名×12日]	663 [51名×13日]
出席総数	404	427
日々出席平均数	33.67	32.85
日々出席百分比	74.82 [(404÷540)×100]	64.40 [(427÷663)×100]

上記図表から、1937年9月には、後藤訓導はA、B両組の合計96名に対し合計25日（12日+13日）の授業を行った。両組の合計出席定数1203（540+663）に対し合計出席総数は831（404+427）なので、合計の日々出席率を計算すると69.1パーセントとなる。

1937年11月22日の理事会では、会長・理事長報告事項として、「六、日本語学校十月分成績報告」（会報9号、55頁）がなされたが、詳細は記載されていない。

1937年12月10日の理事会では、ハ、教育部報告として「日本語研究科は来月よりA、B合同一週5日とす、…ニ、理事長報告 神戸岡崎〔忠雄〕氏出資 日本へ成績良好のもの数名を視察に派遣方 内二、三名は日本語研究科より」（会報9号、55頁）があった。この神戸岡崎忠雄氏出資のタイ人学生招待訪日事業については後述する。更に協議事項の「へ、」として、1937年11月の日本語研究科出席統計が示されている。それによれば、授業日数25、在籍生徒数50、全月皆出席数9、出席定数624、出席総数444、日々出席平均数35.63、日々出席百分比71.15となっている（会報9号、56頁）。

上記11月の出席統計はA、Bの両組の合計である。授業日数は両組合計25日であり9月と同一だが、筆者の計算では11月の在籍生徒数は一つのクラスで26名、もう一つのクラスで24名、合計50名となり、9月に比してほぼ半減している。11月の両組の合計の日々出席率は、71.15パーセント（(444÷624)×100）であるのに対し9月は69.1パーセントであるから、際立った向上は見られない。

---

学団に参加したことが判る。

即ち、1937年9月には在籍者96名(A、Bの2クラス)で開始したが、2ヶ月後の11月には、50名(同じくA、Bの2クラス)と半減。出席率は7割前後のままで改善は見られなかった。このような結果を見て、1938年1月からは2クラスは1クラスに合併して実施されることになった。但し、授業日数は週5日に増加した。これは、月換算では22日程度となる。

1936年度は、日本人小学校の3名の訓導がタイ人向け日本語教授を分担したが、場所が離れた商工会議所で教授するようになった1937年度は、後藤訓導一人が担当したようである<sup>38</sup>。後藤の月当たり授業担当日数は2クラス時代の25日から、1938年1月に1クラス制に変わると22日程度となったが、大幅には減少しなかった。日本語教授日数を週5日に増大させた理由の一つには、3名の日本人小学校訓導の授業負担の公平性への考慮があったのではないだろうか。

### 4.3 神戸岡崎忠雄氏招致泰国学生日本見学団(1938-1941年)

岡崎忠雄(1884-1963、神戸財界有力者、元神戸銀行頭取、元同和海上火災社長など)が、神戸商工会議所会頭時代の1936年3月27日に、神戸経済界で暹羅と貿易上関係がある企業(日本毛織、鐘淵紡績、川崎造船、三菱重工神戸造船所、三井物産、三菱商事など)が、神戸商工会議所内に神戸日暹協会を創立し、同商工会議所会頭(岡崎忠雄)を会長に選んだ(外交史料館I.1.10.0./2-14本邦に於ける協会及文化団体関係雑件/暹羅協会関係, アジ歴B04012421200 45-54頁, 62-76頁)。

神戸日暹協会会長に就任し、シャムとの縁ができた岡崎は、シャムから学生(10名程度)を毎年春に日本に招待し日本を見学させる事業を、私費で1938年4月に開始した。この事業は1938年から41年まで4回実施された。団員の選抜では、日本語を学ぶタイ人に重点が置かれた。そのため、岡崎資金で訪日の機会を得たタイ青少年の多くは、ポピットピムック学校の日本語科学生、暹羅(タイ)国日本人会経営日本人小学校の訓導によるタイ人向け日本語教授事業の学生、更に日泰文化研究所所属の盤谷日本語学校生であった。

1938年から41年まで毎年計4回実施された神戸岡崎忠雄招致タイ学生日本見学団の概要を、『暹羅協会会報』(のち『日本タイ協会会報』と改名)記載の報告(同報11号, 15号, 18号, 19号, 23号, 24号)を基に要約し図表にすると次のようになる。

<sup>38</sup> 1937年度において後藤は日本人小学校では1学級(1年生)のみを担当し、金井(3年生, 5年生)と渡邊(2年生, 4年生)は2学級を担当した(前掲外務省記録I.1.5.0./2-7-10, アジア歴史資料センターB04012142800, 37頁)。後藤を小学校の1学級のみを担当とし、もう一学級分は日本語教授担当に割り当てることができた理由は、偶然にも1937年度には6年生の在学者がおらず6年生のクラスを置く必要がなかったことにもよるだろう(「在外指定盤谷日本尋常小学校(後に盤谷日本国民学校と改称)卒業生一覧表」)。



タイ国における第2次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史

	第一回	第二回	第三回	第四回
滞日期間	1938年4月17日～ 5月1日	1939年5月4日～ 5月15日	1940年5月5日～ 5月31日	1941年5月19日～ 6月5日
参加人数	10名	団長含め12名	10名	10名(男6女4)
参加者の所属	1937年度(1937年9月か ら6ヶ月間)日本人会日本 語講習修了者5名, ポピッ トビムック日本語科生5名	盤谷日本語学校生徒5名, ポピットビムック日本語 科生2名, 他の中等学校 生4名。団長は在タイ日 本公使館勤務	盤谷日本語学校生徒5名, チュラーロンコーン大学 生3名, タマサート大学 生2名	盤谷日本語学校生徒9名, 其他1名
参加者平均年齢	18.8歳	20.0歳	21.5歳	24.0歳
同行案内人	三木栄	新田義實, 永塚喜三郎, 佐藤致孝など	星田晋五, 金沢貞三	金沢貞三

第三回目(1940年)の団員の所属については、日本タイ協会会報には明記がないが、『南支南洋』(台湾南方協会)178号(1940年4月号)599頁に、「日本視察学生団、神戸日本タイ協会会頭岡崎忠雄氏の招待により本年度の日本見学タイ学生団は法政[タマサート]大学学生二名、チュラーロンコーン大学学生三名、在盤谷日本タイ文化研究所学生五名の都合一〇名で四月十九日盤谷発の予定である。(四〇・二・九-タイマイ)」とある。第二回(日泰文化研究所が5名を選び、残り6名をタイ文部省が選んだ)と同様の選抜方法によって、第三回も、5名は盤谷日本語学校生の中から同校が選抜し、残る5名はタイ文部省がタマサート大学生2名、チュラーロンコーン大学生3名を選抜したものと理解される。

1938年から41年まで4回で合計42名のタイ人青年が来日した。ある程度使える日本語力のある者は多くはなかった。そのため、三木栄、永塚喜三郎(写真師、1885年生、本籍神奈川県)、金沢貞三(商業、1888年生、本籍北海道)など長年在タイしてタイ語に通じた日本人が通訳・案内人として同行した。その後の経歴が判明する訪日学生は少ないが、ウェブ検索で判明する者の中では、その後日本との関係が続いたと思われる者は見つからず、タイの官吏になったものが多い。

なお、第二、三、四回に参加した計13名の訪日記(タイ語)を、日泰文化研究所が一書にまとめて刊行したもの(『泰文日本瞥見:岡崎資金訪日見学団員紀行文』日泰文化研究所、1942年5月10日、241頁プラス日系企業の広告)がある。

#### 4.4 日泰文化研究所・盤谷日本語学校の創立

外務省文化事業部第三課は、昭和10年度の「日本語並に日本文化教授機関助成」として、日語文化学校(松宮彌平・松宮一也経営)新規拡張事業に助成した。理由は、「同校は本邦に於て外国人に日本語を教授する機関としてその歴史最も古く又多くの経験を有し好成績を挙げつつあるを以て之が設備拡張並に事業充実等の為助成せり(1万円)」(外務省文化事業部『昭和11年度執務報告』1936年12月1日、244頁)。昭和11年度においても、文化事業部第三課は、日語文化学校を助成した。理由は「軌近本邦の国際的地位の躍進に伴ひ日本語及日本文化を研究せんとする在留外国人頗る増加し従つて其の教育機関の整備を必要とする処同校は其の教授の経験最も深く過去に於て多大の効果を挙げ来りたるに付同校をして新規事業を遂行し其の設立の目的を達成せしむる為助成金を交付せり(昭和12年2月16日決裁、助成金3500円)」(外務省文化事業部『昭和12年度執務報告』1937年12月1日、141頁)。

外務省文化事業部第三課が日語文化学校に昭和 10, 11 年度に助成を行ったことに見られるように、同事業部は日語文化学校を高く評価していた。このような高い評価及び人的関係から、外務省文化事業部が、タイにおける日本語教授事業を拡大するに当たって、日語文化学校主事の松宮一也（1903-1972）にその計画、準備を依頼したものと考えられる。

松宮一也は東京外語スペイン語科卒、アメリカに3年留学し心理学を学んだ。1932年から父親松宮彌平（1871-1946）の財団法人日語文化協会の主事の仕事に携わり、米国カルフォルニア大学の日本語部講師として招聘を受け、1年余滞在して1937年7月に帰国した。その後、外務省文化事業部で日本語の海外普及事業を担当していた伊奈信男（1898-1978、東大文学部美術史卒、1935-40年外務省文化事業部嘱託）と懇談の機会があった。松宮は伊奈に次の趣旨を語った。即ち、米国では日本主導の日本語教育はできない、米国の大学は必要と考えれば、自らで教員も、教授法も、教科書も決める。日本を正しく理解させるためには日本語の普及が必要であるが、日本側が組織し計画して自主的に仕事をできる国はないだろうか、と。伊奈はタイ国の日本語熱の盛んなことを語った。伊奈が与えた、「泰国人の日本語学習熱は最近一層熾んとなり今回日本人会主催の日本語講習会が新学期の開始に際し希望者を募集せる処、申込者三百名を超過せる程なり」<sup>39</sup>という情報に松宮は注目した。それで「外務省でも出先官憲につき更に調査を進めると共に、これを実施する場合の計画を、具体的に作ることを約して別れた（松宮一也『日本語の世界的進出』婦女界社、1942年、239-241頁）。

国際文化事業は国際連盟後重要性を認識され、日本では満州事変、更には支那事変以後、対外文化事業の必要が叫ばれた（同上書、244頁）。

松宮は、伊奈と懇談した翌日から暹羅事情調査を開始。日本の日暹協会の矢田長之助（1871-1940）、矢田の紹介で三井シャム室の宮原武雄（1901-1966）、タイ人数名に会った。日語文化学校の学生であったプラモンパンヤー（1934-35年シャムの駐日商務官）から貰った図書も役に立った。外務省文化事業部の方もシャム現地との連絡交渉を進めた。事業部の部長は蜂谷輝雄、対外文化事業担当の第三課課長は鈴木九万、事務官は吉岡武亮、それに嘱託が伊奈信男であった。松宮、吉岡、伊奈の3者が「日暹文化事業実施案」を作成し、1937年12月28日頃、外務省文化事業部、日暹協会、三井シャム室、南洋協会などの代表者を集めた協議会に提出した（同上書、246-248頁）。

文化事業部は、1938年2月28日に、暹羅に派遣する日本語教師養成のために日語文化学校に400円を助成した。即ち、外務省文化事業部『昭和13年度執務報告』1938年12月1日、146頁によれば、「近時暹羅国に於ては日本研究熱益々勃興し来り対日留学生も亦激増の傾向あるに鑑み寧ろ同国内に日本語教授機関設置の急務なるを認め先づ同国派遣日本語教師養成の目的を以て日語文化学校に対し金400円也を助成せり（昭和13年2月28日決裁）」。1938年6月9日にも、引き続き400円を助成した（同上外務省文化事業部『昭和13年度執務報告』149頁）。この暹羅国派遣日本語教師の養成のために選ばれたのが、星田晋五と高宮太郎である。星田、高宮はともに松宮の日語文化協会の日本語教師養成所の出身である。

<sup>39</sup> 松宮と伊奈の懇談の時期は、1937年7月以降であるから、この情報は1937年9月の後藤訓導による日本語教授事業のことを指している筈である。しかし、本稿で示したように、1937年9月開講の学期には95名の受講者しか登録していない。申込者300人以上は誤報であるか、申込者300人以上になったので選抜して95名に減じたかであろう。しかし、日本人会会報には申込者300人以上に言及した記事がないので、後者の可能性は低いと思われる。

松宮一也は次のように書いている。

それで第一に決めなければならないのは事業の核心となる人の問題であつた。とにかく、日本語を中心とするのであるから日本語教授に経験がなければならないし、それにただ教へていればよいといふのではなく、教授組織や事業の経営にも当らなければならない。そこで色々考へた末、私共の協会の日本語教師養成所の出身で、二箇年程実地教授の経験のある星田晋五氏に交渉してその承諾を得、直ちに泰語の学習、泰国事情の研究などを始めてもらつたのが、昭和十三年の一月であつた。その後四月に入つてから、もう一人職員を派遣する必要があると言ふので、これも日本語教師養成所研究生であつた高宮太郎氏を以てこれに充てることにした。

とやかくする中に、四月も過ぎ五月になり、恐らく日本では最初の対外日本語進出の組織的事業を実行する時が迫つて来た。調査もし研究も進めて行く中に、この事業の難しさが益々認識されて来た。日本側で思つている通りに、泰国側でおいそれと応じるかどうかと言ふやうな懸念も起つて来た。それには、どうも事前に適当な人を派遣して、泰国政府とも渡りを付け、この事業が実現出来るやうに準備工作を行ふ必要のあることが解つて来た（前掲松宮一也『日本語の世界的進出』251-252頁）。

結局、事前準備のため日語文化協会主事松宮一也がシャムに出張することとなった。松宮のバンコク派遣を、外務省文化事業部の執務報告は次のように記している。

盤谷日本語学校整備、最近の暹羅国にも俄かに本邦研究熱勃興し同国内にも本邦文化宣伝の中心を設くる必要に迫れるに付設置せんとの意図を以て先づ在盤谷日本語学校を整備するを急務とし之に助成金を与ふると共に諸般の準備及調査等の為日語文化学校幹事松宮一也を当省囑託として同国に派遣せり（前掲外務省文化事業部『昭和13年度執務報告』161頁）。

松宮は1938年6月30日に神戸を發つて7月10日にバンコクに到着した。経営の主体をバンコクの日暹（日泰）協会とするため同会長ピア・スリカーン・バンチョン（プレイヤー・サリットディカーンバンチョン）会長らと話を纏め、続いてターチャーワンルアンの王室財産局の建物を事務所・教室として契約した。建物の改造などの仕事は、続いて来暹した星田、高宮に引継いで、松宮は1938年9月10日に乾隆丸でバンコクを離れた。

旅券下付表によれば、星田晋五<sup>40</sup>（戸主、明治32年8月8日生）は、「暹羅語研究」の目的で渡暹

<sup>40</sup> 星田晋五（ほしだ・しんご、1899-1978）の経歴は、「大正14 [1925] 年早稲田大学社会哲学科卒業後、大学院にて言語学研究、かたはら、日語文化学校にて日本語教授に当たる。昭和13 [1938] 年タイ国にわたり、日本外務省文化事業部助成により、かの地日本-タイ協会のもとに「日本-タイ文化研究所」を創立し主事となり、「バンコク日本語学校」を併設、理事たり。帰朝後、財団法人国際文化振興会に、のち、財団法人日本タイ協会に勤務（星田晋五『新制タイ語とタイ字』大東亜出版株式会社（発行者、匠瑛胤次）、1944年12月1日発行、掲載の著者略歴）。星田の詳しい経歴は、星田晋五著（星田言編）『名前の研究』近代文芸社、2002年10月、326-329頁に見ることができる。それによれば、星田は1925年4月から1935年6月まで神奈川県立平塚農業学校教諭（英語）兼同県立実業補修学校教員養成所教諭として勤務した。その後、1936年4月に財団法人日語文化協会日語文化学校教員に就職した。日語文化学校での2年間の勤務実績を評価した同校主事松宮一也の推薦で1938年7月にタイ国派遣。日泰文化研究所・盤谷日本語学校の初代責任者に就任するも、1939年12

するめ、1938年6月30日に東京府で旅券の下付を受け（マイクロフィルム、リール旅113）、8月1日にバンコクに到着した。一方、高宮太郎（戸主、本籍福岡県福岡市大字西堅粕、明治41年7月19日生）は、「研究」の目的で渡暹するため、1938年6月23日に東京府で旅券の下付を受け（マイクロフィルム、リール旅112）、8月10日にバンコクに到着した。

#### 4.5 初代主事星田晋五の日泰文化研究所・盤谷日本語学校に関する報告

1938年8月1日に来タイし、松宮とともに日泰文化研究所、盤谷日本語学校の創立に尽力した星田は、日本人会会報10号、11号に次の2報告を掲載している。以下に、2報告の全文を再録する。原文と再録版とは同一内容であるが、漢数字の殆どを、算用数字に変更しており、また、図表表示の方が分かり易い部分は図表に変更している。

##### 星田晋五「タイ-日本文化研究所及びバンコック日本語学校の開設」

曩に、東京芝の日語文化学校の松宮一也氏が、昨年〔1938年〕7月10日当地に来着、文化研究所を日暹協会の下に開設するにつきタイ政府関係者、日暹協会関係者、日本人会の各方面に、一般的諒解を得、9月10日に帰国の途に就かれ、その後それを実際に具体化し実現する仕事が残されました。私はその後を引継ぎ、之に当る事になりましたが、その場所が確定したのは、8月半過ぎの事で、江畑商会の本多〔寛次郎〕さんの御世話で8月31日漸く家主プラ克蘭・カン・ティー（御料局）に家屋賃借の手続を了し9月1日より工事の手入れを始めたのでした。この文化研究所はその後「タイ日本文化研究所」と称する事になりましたが、「バンコック日本語学校」はこのタイ日本文化研究所の一事業として開設されたものであります〔写真⑳〕。

この学校の組織と家屋の設備とが、私達に分担された仕事で、松宮準備員が出発するや直ちに先づ、校主たるべき人を頼み、校長を定め、教員を求め、事務員を探し、規定を作り教程を編み、教材を整へ、帳簿を誂へ、又文部省へ認可申請をするのでありましたが、何分、国情が判らず、法律制度を知らず、知己が無いので、法律を調べ乍ら、国情を尋ね乍ら伝手を求め乍ら事を運び、それも創業の事として、諸の事情が一所になつて、事の前後順序が錯綜して、臨機と振合ひで、あやつり乍ら而も一定の目標に進めて行かねばならず、通訳はなく、助手はなく、路を知る運転手はなく、ただホテルの電

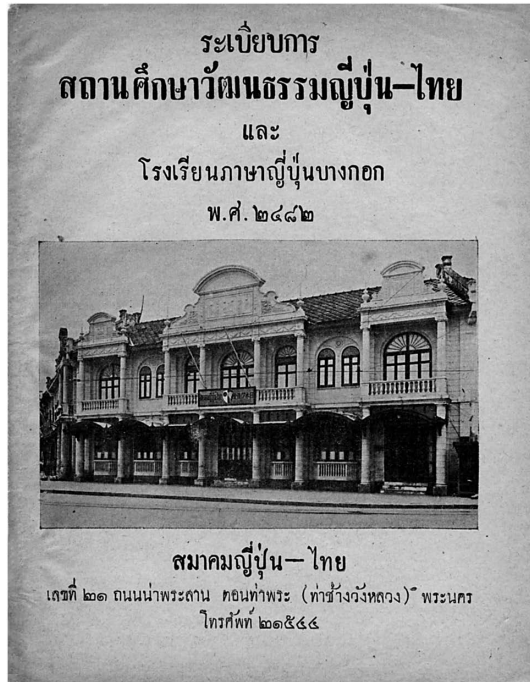
---

月に依願退職し、1940年1月から1941年3月に帰国するまで読売新聞バンコク駐在記者。帰国後1941年5月から42年3月財団法人国際文化振興会南アジア文化事業委員会勤務、1942年4月から財団法人日本タイ協会調査部勤務。戦後1948年10月から1950年12月まで連合軍総司令部民事検閲部特殊翻訳勤務、1951年1月から1955年12月まで法務省事務官、1956年1月から1972年12月まで在日タイ国大使館に勤務した。即ち、星田は39歳から73歳までの大部分をタイ関係の職場に勤務した、在野のタイ研究者であった。

但し、星田晋五の日泰文化研究所・盤谷日本語学校主事辞任時を、1939年12月とした上記の記述は事実とは異なる。星田晋五は、盤谷日泰文化研究所主事の肩書きで、1940年5月に岡崎氏招致第三回タイ国学生旅行団（1940年5月5日～5月31日に滞日）を引率して来日したことは次の文献から明白である。即ち、

第三回タイ国学生旅行団一行十名は盤谷日泰文化研究所主事星田晋五氏に引率され〔1940年〕五月五日神戸入港盤谷丸にて来朝した」（『日本タイ協会会報』19号、1940年6月、104頁）。

星田晋五が辞任、もしくは罷免されたのは、引率した学生団とともに盤谷に戻った後、即ち1940年6月と考えられる。なお、星田の長男で、父と同じく早大卒の在野研究者星田言（1933年生）が編集し、私費出版した『星田晋五寄稿・伝文・遺稿著作集』2002年9月、307頁、がある。



写真⑳

話と辻の三輪車と地図によつて、探りながら駆け廻り、学校の組織を認可へ猛進するのでありますが、途中10月10日からは、設備の仕事の方までも背負ひ込まなければならなくなり、全く日もこれ足らざる程でありました。工事については設計の変更や不明瞭のため、勘定外の手違ひを生じ、日高〔秋雄〕さんに随分御心配をかけたものでした。11月からは開校といふ意気込であるのに10月半も過ぎ未だ目鼻もついて居ずいつから始まるのかどのお尋ねもありましたが、大車輪で運びましたが何分学校の組織の方の仕事もあるので、一人ではなかなか手が廻りかねましたが、それでも11月2日には文部省より認可を得、これで初めて「バンコック日本語学校」と街頭に名乗り出、丁度、明けて11月3日の明治節は何とも云へぬ静けさを感じました。私が後を受けて2ヶ月、学校開始の準備は出来ましたが、生憎、タイの方では憲法祭や学校休暇で、授業の開始には適当ならず、タイの学校と歩調を合せ、12月21日より開始といふ事になり、これまでは更に設備の充足を計りました。

いよいよ火蓋を切れば生徒は殺到、定員158名は一週間足らずで満員となり、20日間に316名の入学志願者を得ました。之を教へるのにどうして教へるかといふ事を時々きかれますが、教授の主義原則は日本語を日本語で教へるので、英語は勿論タイ語も使はないのが本旨でありますのみならず、それを使つては却つて始末に困る結果になるのが、私の経験に見る所であります。訳するのでなく、文法を説明するのでもなく、ただ物を見せ聞かせ又感ずかせるのでありますが、それには特殊の研究や経験を要します。この方法は言語の教授には一般に有効とされ、日本でも中等学校での英語の教授は既に文部省でも10年以上前から、この方法を採用しているのであつて、従来語学を教へた常識的な方法とは全く違つた方法であります。これに就いてはここで縷々述べる場合ではありませんから他の

機会にゆずりませう。唯、これ迄の一般語学教授よりは確かに効果的である事は確信しています。

この日本語が基礎となつて、やがてタイ人が日本人と話し日本の新聞書籍等を読み、種々な方面に益々日本-タイ間の交渉を深めて、両国文化の提携にまで進んで行く事が期待されますが、ここに日本語教授以外になすべき種々なる文化事業があるのであります。

私が茲に申述べたい事は、この文化研究所の仕事が、単にタイ人に対する仕事に止まらず、在留日本人に対してもなせば便宜な仕事が多々あるのであつて、私は在留日本人も大いに使用し得る機関たらしめたいと思つてゐるのであります。タイ人が日本語及び日本文化の研究をすると同時に、在留日本人も亦タイ語やタイ知識を手短に得る道が必要で、従来のように、各自が分散的に奴婢のタイ語や断片的タイ知識によるのではなく、熟達者のタイ語教授、タイ及び日本識者の責任あるタイ解説等によつて、日本人が組織的に系統的にタイ語又はタイ知識を得、その他日本-タイ両国の接触到係かる種々なる機関たらしめたいと思つてゐるのであります。かくて文化研究所が日本人もタイ人も盛んに出入する事により、自然日本人タイ人相互の接触交渉の道が一層開け、一層密接になつて行く事と思ふのであります（〔1939年〕2月12稿）（星田晋五「タイ-日本文化研究所及びバンコック日本語学校の開設」『タイ国日本人会会報 第10号』1939年9月30日、79-80頁）。

#### 星田晋五「日本-タイ文化研究所の第一年度」<sup>41</sup>

さきに本会報第十号で、日本-タイ文化研究所の創設経過を述べましたが、本研究所も昭和13年9月創設に着手し同年12月21日開館、昭和15年3月31日をもつて、まづ第一年度を経過しました。

日本-タイ文化研究所は日本-タイ協会のもとに実際活動機関としてあり、日本語教授と文化紹介其他の諸事業をなすのであります。

日本語教授については、タイ国私立学校令により「バンコック日本語学校」を設け、規令により校主事校長と教員をもつてなつており、学校の学生収容席は約160、開校時間は午後5時より8時まで、学生の便を計り夕組と夜組の二部に分ち、本科（1日1時間20分授業3ヶ年）特別科（1日2時間40分授業1ヶ年）の二種あります。

本年度は学年中途から開始したため、普通より一学期多く四学期になり、授業日数は

第一学期	昭和13年12月22日より昭和14年3月24日まで	66日
第二学期	昭和14年5月17日より昭和14年8月17日まで	63日
第三学期	昭和14年9月1日より昭和14年12月4日まで	64日
第四学期	昭和14年12月20日より昭和15年3月26日まで	64日
	合計	257日

でありました。開校当初は316名の入学申込者が殺到し、うち156名の定員を選抜しましたが、これらの学生が全部一学年間継続する訳でもなく病氣転住渡日多忙などで途中退学し、その空席を放置するのも無駄なことですから補欠し、修学進度の相違により一学期毎に区分し学級を編成し、第一学年度末（昭和15年3月26日）現在では、これを動態的に記すと

<sup>41</sup> 星田は、本稿と類似の内容を次の著作にも書いている。即ち、星田晋五「日本-タイ文化研究所の創立と事業」『日本タイ協会会報』第25号、1941年12月、71-83頁、及び星田晋五「タイ国に於ける日本語」『新亜細亜』3巻7号、1941年7月、38-47頁、など。

タイ国における第2次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史

本科第一期組	24
本科第二期組	16
本科第三期組	25
特別科	12
合計	77

	第一期	第二期	第三期	第四期	合計
学期初	158	60	124	86	
途中退学	112	13	63	23	211
途中補欠	14	77	25	14	130
学期末	60	124	86	77	

即ち、入学申込者は一学年間中

第一期 490、第二期 69、第三期 14、第四期 19 合計 592

で、その中、入学者は

第一期 172、第二期 77、第三期 25、第四期 14 合計 288

でありました。日常の学生数は、ここでは印刷の都合上、図示できませんが、大体、多い時は100名以上150名の間、少い時は70名以上100名の間を上下して居りました。

その学習状態を毎日の出席率に見ますと、これもここに図示できませんが、第一期初は55%を上下し、それより学期末に至つては25%にまで漸減しましたが、第二期初は85%より漸減し55%まで至り、第三期は85%を上下するのみで後半稍70%を上下する気味合であり、第4期は70%より85%まで漸増しそれより50%に漸減する状態でありました。

学生の職業は

官公署員 96 (国防省 26 (軍人 20, 其他 6), 文部省 20, 経済省 20 (本省 7, 電話局 7, 放送局 3, 観光局 1, 鉄道局 2), 内務省 10, 農務省 8, 大蔵省 5, 司法省 2, 宮内寮 3, 議院事務局 2), 学生 63, 無職 57, 商社員 32, 教員 20, 巡査 7, 医師 5, 看護婦 7, 僧侶 1, 合計 288

又、年齢は

13-15才 18, 16-20才 106, 21-25才 94, 26-30才 47, 31-35才 14, 36-40才 8, 41-45才 0, 46-50才 1, 合計 288

又、男女別は

	男	女	合計
第一期	142	30	172
第二期	60	17	77
第三期	19	6	25
第四期	8	6	14
合計	229	59	288

又、科別にすれば

村嶋英治

	本科	特別科	合計
第一期	156	16	172
第二期	48	29	77
第三期	23	2	25
第四期	14	0	14
合計	241	47	288

そして本学年中、本校学生で渡日した者は

	男	女	計
医科	2	0	2
歯科	1	2	3
獣医	1	0	1
缶詰	1	0	1
工芸	2	0	2
電気	2	0	2
棉花	1	0	1
看護	0	6	6
保姆	0	6	6
	10	14	24

でありました。

学生達は、1ヶ年後は日本語を話すのみならず片仮名、平仮名、漢字の読み書きもし、小学読本巻五までは進みました。

学生達の質柄目的などについては、この1ヶ年の目まぐるしい日泰関係、日支関係、世界情勢の転により、著しく変化して行つた様であります。要するに100名内外の日本語学習者が何等の積極的募集もなくして自然に校門に集る事実、そして機会と資力に恵まれば勿論渡日を喜ぶでせうが、必ずしもそれ等の見込みもなく又当地の日本商社に就職希望するでもなくして、兎に角日本語を実利としてか教養としてか習得したいといふ多数の者のある事実に対しては、いろいろ考へさせられる事があります。

次に文化紹介其他の諸事業についてであります。図書は昭和14年7月外務省から約八百冊贈られ、この外各方面よりの寄贈も加へ現在約千二百の和泰洋の図書があり、これを分類し日本-タイ協会会員やバンコック日本語学校学生の閲覧に供する外、日泰両国の公共団体及び在留日本人又は其他日本研究の特志家などの閲覧の便を計り、日本人会へは昭和14年8月その図書目録をお届けしましたが、尚ほ貸出の便も考へ、一年度内タイ人64冊、日本人48冊、其他7冊、合計119冊の貸出図書数を見ました。

又、音譜も昭和14年7月外務省から約140枚贈られましたが、予算の都合で音譜はあれども蓄音機が無い始末、遂に学生達はポータブルを家から持参し来り聞く有様であつて、何とかして音譜の有効な利用法をと考へ、公共団体へ音譜を貸出する道を開き、タイの諸学校や映画館などに利用されましたが、昭和15年1月漸くラヂオ蓄音機を設備し得て現在は各公共方面の利用の外、社交室内での一般に利用し、又ラヂオについては、日本からの放送を聴取する様つとめ、殊に日本の海外ニュース放送は、その時刻の都度拡声器を以つて一般の聴取に便し、又別にタイ人の短波聴取者の配布網を作



り日本海外放送月報を配布する様にしました。

次に、日本映画については、未だ独自に映写する予算もなく、せめて日本語学校学生又は日本-タイ協会会員にでも出来るだけ日本映画を見せる様に、これは日本人会又は在郷軍人会などその主催者の御好意により、時折の映写にその傍観の便を頂き、この1ヶ年7回の観覧をなすことが出来ました。

又、日本事情をタイ人に知らしめ、日本人もタイ事情を知る講演会を計画し、差当りその第1回として日本より帰国のタイ留学生による講演会を開きました。

又、日本語学校学生には、教材による日本語以外、日常時事の実際語を学ばしめ兼ねて日本事情解説又は日泰人間の話題に便ならしめるため、日本語学習週刊新聞「日本語のしをり」を昭和14年10月3日より1週1回、時には臨時号を発行し、本年度中第25号まで出しました。

其他或ひは、日本留学タイ学生会の結成を助成したり、又恒例になれる岡崎〔忠雄〕氏招致の日本見学タイ学生団をして相互に引続き日本の関心を中心として結ばしむべく岡崎会を結成し、又タイ人の日本商社への職業紹介をなし

	求職	求人
第一期	3	3
第二期	4	1
第三期	11	3
第四期	4	1
合計	22	8

	就職	未就職
第一期	2	1
第二期	1	3
第三期	2	9
第四期	1	3
合計	6	16

或ひは、日本人にタイ語教師の紹介をしました。

	求職	求人
第一期	13	3
第二期	13	2
第三期	4	7
第四期	3	3
合計	33	15

	就職	未就職
第一期	3	0
第二期	2	0
第三期	5	2
第四期	3	0
合計	13	2

尚、タイ人の渡日留学又は就職の斡旋をなし、5名の看護婦実習者を日本に送りました。

又、日本人の間にはタイ人名の称呼一定せず、時々滑稽なる行違ひあるに顧み、タイ姓名に対する日本仮名正字法を考へ、タイ人に日本字名刺をつくる便を計りました。

その他、タイ国における楽器の調査研究に関する出版も致すことにしました。

以上は、日本-タイ文化研究所の日本語教授と文化紹介其他の諸事業の二方面の1ヶ年の実績であります。要するに、この第一年度は、昭和13年9月より3ヶ月間の改修設備工事と組織規定編成との準備期に次いで、開館第一ドツに押寄せ来る毎日の学生の授業とその進行に伴ひ教材の準備、学級の増加、教師の補充、調査集計など複雑化して行く学校管理上の諸々なる問題や日々の事務、一方予算の関係上未だ整はなかつた設備の充実、多数図書の蒐集分類など、何分総てが創業時代の事とて恰も機械の製作の様に、先づ部分品から作り始め次いでその組立を整へるまでは、たとへ些少のギヤ一つの不備も全体の運転が不可能で、如何に雑多些細なものであつても先づそれが整はずしては全体の進行が出来ず、それに日本語教授の外に文化紹介其の他の諸事業をせずしては片手落で、講演、集会、出版、紹介、斡旋など兎に角最初の実施計画案は予算の許す限り、又、手の及ぶ限り、一応は遂行実現し、この第一年度を経過し得ました。勿論、先例ない所に開拓して行く事とて決して満足す



写真⑩

べきものではありませんが、不慣なタイ人、僅かな人員にこれだけの事は精一杯であり、その間、不行届勝な点多々御座いましたが、大方の御蔭によりまして、ここまで達することを得ました事を深く感謝して居ります。今や設備も一通りは終へ仕事の順序形も纏り、一年の行事も一循環し、これで第一段を終り、後はハンドルを廻せば右にも左にも、又油次第で遠くも近くも運転出来る様になりました。

誕生し発育し、今後皆様の御声援により健全なる成長をする様祈つて居ります（15, 7, 1 稿）（星田晋五「日本-タイ文化研究所の第一年度」『泰国日本人会会報 第11号』1941年3月20日、49-55頁）。

1938年7月の来タイ以来、初代主事として日泰文化研究所及び盤谷日本語学校の創設に尽力した星田晋五は、もう一人の教師高宮太郎と不仲で対立し、喧嘩両成敗で2年足らずで両人は、管理責任者の日本領事により実質上解雇されてしまった（注40のように、星田が主事を辞したのは1940年6月頃）。

その後任の主事として、田村浩陸軍武官の紹介により平等通昭（1903-1993）（写真⑩、1990年8月26日筆者撮影）が採用された。

平等は1940年10月25日にバンコクに到着し、江尻賢美に出迎えられた。星田、高宮両人が実質上解雇されて後、日泰文化研究所は江尻賢美が頼まれて一時預かっていた。江尻は1906年から医業

者としてタイに住み、人望があった<sup>42</sup>。

平等は次のように書いている。

この日泰文化研究所と日本語学校は外務省の補助金で運営している外郭団体で、直属団体でなく、公使館の副領事の天川四郎 [平等はこの人物に反感をもっており故意に仮名にしている、実名は天田六郎] 氏の監督下にあり、身分も判然とはしてないようです。さきの騒動の結果として二人 [星田, 高宮] が免職され、今は留守役に江尻賢美翁がここに駐在し、補助金も日々必要経費を公使館から貰い受けることになっています (前掲平等通照・平等幸枝『我が家の日泰通信』18頁)。

なお、平等の経歴及びバンコクでの活動は、近刊予定の拙著 (『南北仏教の出会い：近代タイにおける日本仏教者, 1888-1945』早稲田大学アジア太平洋研究センター・リサーチシリーズ第7号) に譲る。

## 終わりに

本稿は、第2次世界大戦終結期までのタイ国の日本語教育に関して、既存研究の乏しい事項のうち次の4事項について、従来利用されたことのない資料を用いて明らかにしようと努めた。

即ち、(1) タイ国立中等学校ポピットピムック校で仏暦2477 (1934/5) 年に開始された日本語教育授業とその担当教員植松秀雄の経歴、

(2) タイ人著者が、1937年から1942年にかけて執筆・刊行した10種類の日本語学習書・辞書、

(3) 1911年から在タイし1939年にタイに帰化した三木栄 (タイ名ワタナー・トゥリーブルックパン) が、1938年から1943年までに日本・タイ両国人向けに執筆・刊行した5種類のタイ語・日本語学習書、

(4) 日泰文化研究所に属した盤谷日本語学校が創設 (1938年12月21日開校) される以前の前身、即ち暹羅国日本人会経営の日本人小学校訓導 (後藤善吾等) を使ったタイ人向け日本語教授事業、である。

上記の事項に関しては、一定の解明はなされたものと考えますが、もし今後、植松秀雄、後藤善吾等の個人資料が発見され或はポピットピムック校史が編集され、これらを使用することができるならば、より詳しい解明が可能となるであろう。

**謝辞** 本研究は科研費 (研究課題番号16K02012) の助成を受けたものである。

---

<sup>42</sup> 江尻賢美の経歴は、村嶋英治「バンコクの日本人 (連載第94回)、泰国日本人会の起源」『クルンテープ』(泰国日本人会月刊誌) 2018年6月号、13-16頁に詳しい。なお、本号 (第94回分) を含む、連載96回分の総ては合冊して、村嶋英治著「バンコクの日本人：タイ国日本人会月刊誌『クルンテープ』連載」(全634頁) として、早稲田大学リポジトリ上に掲載しており、自由にダウンロードできる。上記江尻賢美の経歴は、早稲田リポジトリ上の合冊版では、586-589頁である。